

1967年10月8日



山崎博昭君追悼
羽田の闘い



1967年10月8日

山崎博昭君追悼 羽田の闘い

目次

第一部 —1967年10月8日—

- 2 山崎博昭君の死が歴史に残したもの——10. 8 羽田闘争の教訓
- 11 労学呼応した数時間の死闘——10. 8 羽田闘争の記録
- 18 山崎君の死は全世界の人々の魂をとらえた——10. 8 羽田闘争の波紋
知識人が三つの声明/10. 8 闘争の国際的波紋/呼応するアメリカ人民

第二部 山崎博昭君をしのんで

- 24 詩・弟へ 山崎建夫
- 26 生いたちと写真
- 28 日記

第三部

- 33 山崎博昭君虐殺をめぐる官憲の謀略
- 37 政治的な「れき殺」説/小長井 良浩弁護士
- 39 虐殺抗議・山崎博昭君追悼中央葬——追悼のことは、弔辞、弔電
- 46 全日本・全世界の闘う学生・労働者・人民へ 秋山勝行
- 48 十・八羽田闘争に対し、五百万円救援資金カンパを訴える 全学連中央執行委員会
羽田十・八救援活動についての要請 知識人四十八氏

故山崎博昭同志。

十月八日、羽田空港の闘いの中で君は斃れた。佐藤首相の南ベトナム訪問阻止の闘いの先頭に立った君は、国家権力の凶暴な弾圧に屈せず闘い抜き、ついに十八才の貴い命を、プロレタリア解放のために捧げた。われわれは、同志山崎の貴い命を奪い、あまつさえその罪を共に闘った仲間におしつけようとして、権力の血に汚れた卑劣な攻撃に、煮えたる憤りを押さえることができない。

故山崎博昭同志。君の十八年間の短い生涯は、人間の未来を拓くプロレタリア解放の戦士にふさわしいものであった。われわれは君がマルクス主義学生同盟(中核派)京大支部の指導的同志として反帝国主義・反スターリン主義の旗のもと、共に闘ってきたことを大きな誇りに思う。君はすでに高校時代から、大手前高校で反戦高協の指導者として活躍し、関西高校生運動の発展を担ってきた。京大入学と同時に、学生運動に参加し京大はもちろん、日本学生運動の若きホープとして期待されていた。その君を、限りなく前途を残して失ったことは、日本の革命運動にとって償うことのできぬ痛手である。

故山崎博昭同志。だが君の死は日本の労働者学生ベトナム反戦の決意を、全世界の人々に示す力となった。佐藤首相の南ベトナム訪問は、日本のベトナム侵略戦争参戦の決定的段階を画すものであり、十月八日の闘いは、日本が国をあげてベトナム人民殺りくに参加するのを拒否する、日本労働者人民の人間としての責任にかかわる闘いであった。だが、この日羽田に結集した、全学連・反戦青年委員会を中心とする五千の部隊だけが

プロレタリア解放の若き戦士
故山崎博昭同志の霊に捧ぐ

革命的 共産主義者同盟
マルクス主義学生同盟(中核派)
マルクス主義青年労働者同盟

真剣にこの責任を自らのものとしたのであった。日本の革新陣営、なかんづくその指導部と労働組合の本隊が全く闘いを放棄している中で、安保以来なすとげられなかった青年労働者と学生の団結が、この闘いを担いえたことは、日本の革命運動に、新しい地平を拓いたものである。日本共産党が、この日「赤旗まつり」をもって闘争に敵対してくる中で闘いは二月から七月の砂川基地闘争をつくりだした全学連と反戦青年委員会を支える新しい革命運動の流れによってつくりだされた。日本の歴史に大きな転機となるであろう七〇年安保闘争は、すでにこの力によって進みはじめている。君は、自からの命をもって、既成左翼指導部の裏切りに抗し、進むべき血路を拓いたので。権力は、この新たな力の台頭に恐怖し、あらゆる限りの弾圧と君の虐殺をもって襲いかかった。だが羽田に結集した労働者学生は、これに屈することなく闘い抜き、逆にベトナム侵略に加わる佐藤の血まみれの正体を全人民の前に暴きだした。権力は、これに対し「学生暴徒」なるおびただしいデマ宣伝をもって逆襲し、キャンペーンと弾圧によって、「この力の根を断とう」としている。この逆襲の中心に、こともあろうに君の死を、「仲間が殺した」とする大謀略がすえられていることに、われわれは言い知れぬ憤りをおぼえている。あの日、ベトナム

ムでの大量殺りくのために、われわれのデモを禁止し、弾圧の限りをつくし、君を打ち倒し、虐殺したのは、まぎれもなく警官隊であった。われわれは、下山・三鷹・松川のあの謀略のごとく、権力の手による犯罪のデッチ上げを、絶対に許すわけにはいかなかった。そして、全ての報道機関があたかも監視庁機関紙と化している上に、日本共産党が、この権力の謀略の共犯者として羽田闘争に対するデマと攻撃の先兵と化していることも、絶対に許すことはできない。だが、日本労働者人民は弾圧と謀略の正体を見抜き、君の死に深い悲しみと憤激をもって、続々と立ち上りつつある。われわれの力は、このような攻撃に屈し去るほどひ弱ではない。われわれを先頭とする断固たる反撃によって、羽田に参加した人々の体験によって、君の死によって深く胸をつかれた広汎な人々の反省と目ざめによって、いまや全国津々浦々に、虐殺抗議と反撃の行動が湧き起っている。

故山崎博昭同志。君の死は、あらためて全ての日本人民に、佐藤ベトナム訪問の重大な危険と、国家権力の恐るべき正体を衝撃をもって伝えた。十・八闘争を放棄し全学連・反戦を孤立させた革新陣営の弱点と、権力の尖兵と化して労働者人民に襲いかかる日共スターリン主義の正体を、またしてもあきらかにした。この衝撃の中から、日本労働者人民の新たな闘う力が、一層大きく立ち上りつつあるのだ。十月二十日には国鉄労働組合が、立川基地への軍需物資輸送拒否の闘いに立ち上り二十一日には全国二百万の労働者が、ベトナム反戦に決起する。この日はまた、アメリカでの百万人の大デモをはじめ全世界人民が立ち上るのだ。そしてこの力をもって、十一月、佐藤首相の訪米を阻止すべく、われわれは再び君の斃れた羽田に向うであろう。

故山崎博昭同志。君がわがマル学同中核派の秀れた戦士として、帝国主義とスターリン主義を打ち倒し、プロレタリア世界革命をめざして進んだ道は、この闘いとおして一層多くの同志を加え、さらに切り拓かれていく。七年前の六月十五日、われわれ日本の新しい革命運動の創成期を担った偉大な戦士、故権美智子同志を失った。だが彼女の命は、日本の革命的共産主義運動のより広く強い前進の中に蘇えり引き継がれてきた。今世界の激しい運動の中で、君がめざした目標は、一層その正しさを示しつつある。君の命は、わが革命的共産主義運動のより大きな戦列のなかに蘇えり、永遠に引き継がれるであろう。

故山崎博昭同志。今工場で、学園で、地域で、悲しみを怒りにかえて、ゆっくりと立ち上りつつある日本の新しい革命の足音を聞いてくれたまえ。われわれは君の遺志をつぎ、君の遺影を囲む全日本の労働者人民の先頭に立ち、プロレタリア世界革命の勝利のために、断固として進むことを誓う。

故山崎博昭同志。安らかに眠れ。
一九六七年十月十七日

山崎博昭君の死が歴史に残したもの

十・八羽田闘争の教訓

はじめに

十月八日、佐藤首相は、南ベトナム訪問のために羽田空港を出発した。この首相の旅は、多くの人々の強い反対と疑惑につつまれたまま強行された。特に、あくまでもこの出発を阻止するため、羽田空港に向った五千人の労働者、学生は、激しい弾圧を受け、京大生山崎博昭君は、ついにその中で命を断たれた。山崎君の死は、日本中の人々に深い衝撃を与えた。広く海外にも、この衝撃は伝わり、ワシントンやサイゴンで、戦争を続ける人々を恐怖させ、戦争に反対する人々の心をうった。わずか十八才の若さで、闘いの中に斃れた山崎君が、命をかけて目ざしたものを、私達がしっかりと受けとめ、その死の歴史的な意義をうけ継いで進むことによって、山崎君は私たちの心に、永遠に生き続けるであろう。

一、佐藤首相のベトナム訪問の狙い

十・八闘争に対して、一斉に加えられた政府、マスコミの攻撃は、「なぜ山崎君が羽田に行ったか」を全く無視したものであった。佐藤首相の南ベトナム訪問という、そもその中心問題から、国民の関心をそらせるのが、その狙いである。このことは逆に、まず首相の南ベトナム行こそ、問題にされるべきことであることを示している。

佐藤首相の南ベトナム訪問は、日本がベトナム戦争に一層加担し、アメリカとともに、この泥沼の侵略戦争に自からのめり込んで行く決定的な一歩であった。

首相がある国を訪問するということは、国をあげてその国と友好を誓い、相互協力を約束する最高級の行動である。ベトナム戦争の当事者、南ベトナム政府を、

こうした最高級の姿で援助することが、ベトナム戦争の何よりの加担であることは明白である。このため、西欧「自由主義」諸国さえ、こうした態度はとらず、これまで元首が訪問した国は、アメリカ、韓国、オーストラリアのみという状態であった。

ベトナム侵略戦争は、ますます泥沼の様相を深め、しかもこの春ごろから米軍の死傷者が急増し、戦局はますますアメリカに不利になっていった。アメリカ帝国主義は、この局面打開のため、第一に北爆の際限ない拡大とさらに米軍を増加するというエスカレーションを行ないつつ、第二に、アジア各国に派兵の強化を要求し、第三に南ベトナム大統領選挙を行って「民政」の形をととのえることで、なんとか危機をのりきろうとした。佐藤首相の訪問は、日本が進んでこの第二の要請に答えながら、同時に「民政移管」後初の訪問客として、か、い、政、権、を、テ、コ、入、れ、す、と、い、う、高、度、に、政、治、的、な、意、味、を、も、っ、て、い、た、の、で、あ、る。

二、十・八闘争の世界的波紋

山崎君の死をかけた闘いは、全世界に、日本人民がいかにか強くベトナム戦争に反対しているかを知らせるものとなった。首相のベトナム訪問が、一人の人間を殺して強行されたことは、日本人民が決してこれを認めていないことを伝える悲しい知らせとなった。

サイゴン大学学生連盟、民族解放戦線は、ただちにこれにこたえ、山崎君の死に深い哀悼の意と連帯の決意を表明した。アメリカの反戦運動諸組織をはじめ、イギリス百人委員会、西独学生組織など、全世界のベトナム戦争に反対している人々が、続々と抗議と連帯を表明した。ワシントンの米政府当局は、安保以来沈静したと思われた日本の反戦感情が、あまりにも強烈なことを知って大きな衝撃をうけ、サイゴンのかいらい政権は、恐怖のため一層厳重な警戒体制を指令した。

この八日の羽田の闘いは、十月二十一日の全世界のベトナム反戦運動の高揚をつくりだした大きな動力源となった。十月二十一日、アメリカを中心に全世界で、ベトナム反戦の統一行動が予定通り行われたが、これは歴史的な大闘争となった。

アメリカでは、すでに徴兵カードを焼くなどの闘いが全米にひろがっていたが、この日ワシントンに二〇万人のデモがおし寄せ、軍隊の弾圧に屈せず国防総省に突入、国防総省はついに休業に追込まれた。イギリスでも西ドイツでも、北欧でもオランダでも、数千、数万のデモが続いた。アメリカのデモは、一九三二年の史上最大の規模であり、先進資本主義国の内部から、これほど大きな民衆の運動が、しかも世界的に統一しておこったことは、戦後はいじめたものといえる。

ベトナム戦争を本当に止めさせよう唯一の力—侵

だが、南ベトナム大統領選挙は、大がかりな不正選挙でそのからくりを世界中に示し、かろうじて「当選」したチュウ・キ政権は、民族解放戦線はもちろん、選挙に参加した南ベトナム人からさえ、激しい非難をあびたのである。そこへ乗込み、これをテコ入れし、援助を約束することが、どんな政治的意味をもつかは明らかであった。そのうえ、この訪問を機に「平定計画」とよばれる軍事作戦に、日本が多額の援助を行うことが用意されており、これまで以上に、積極的な戦争参加となることは明らかであった。

佐藤首相は、ベトナム訪問を「和平の道をさぐるためであり、戦争に行くのではない」と言明してきた。だが、すでにのべたとおり、その現実の役割は、はっきり戦争協力であった。おまけに、それまでの東南アジア歴訪の過程で、日本にベトナムと平和への意思も力もないことが次々に明らかになり、佐藤首相自から「和平の手がかりなし」と言いだす有様であった。首相訪問の狙いは、日ごと苦境に立つアメリカを助け、ベトナム侵略を日本の参加で強めることをとおして、日本の帝国主義的な勢力拡大をめざすものであり、首相は、ベトナム訪問の「実績」をもって十一月に訪米し、七〇年安保改訂にからむ政治交渉の道具に使おうとしていたのである。

日本の労働者人民は、佐藤首相のこうしたやりかたに、広汎な反対の声をあげていた。日本はすでに、沖縄と本土の基地を提供していることで、ナバーム弾などの生産で、政府の再三にわたる北爆支持論で、等々、深くベトナム侵略に加担してきた。だが日本国民の多くは、決してこれに同意していなかった。新聞の世論調査でも八五%がベトナム戦争反対を表明し、さまざまな反戦運動が続いていた。

しかし、広汎なベトナム反戦の声は、有効な反対運動に組織されず、力として発揮されてはいなかった。

革新陣営の低迷、なかんずく社会党、共産党、総評などの指導部が、殆んど有効な運動を提起してこなかったことがその原因である。ベトナム反戦運動は、全学連の行動を先頭に、反戦青年委員会の労働者、ベ平連の市民運動など、こうした既成の指導部とはなれたところで、熱心に進められていた。

十月八日よいよ出発という段階に至って、あくまでこれを阻止しようと行動に立上ったのは、三千人の学生と二千人の労働者、市民の計五千人にすぎなかった。だがこの力は、この間反戦闘争の中で、着実に力をひろげてきたものだった。特に今年の二月から七月にかけて、砂川基地拡張阻止のために闘い、またこの間、原子力潜水艦寄港に反対して闘って行く中で、一つの力にまとまってきたものである。この力は、全学連の学生と、反戦青年委員会に集まった青年労働者を中心に、政治的党派をこえてつくられてきた、砂川の闘いを進め、八月六日には広島に集まり、この日の闘いを誓い合った人々である。

安保闘争当時とくらべ、全学連と共に、二千人の青年労働者が共に立上ったことは、大きな力であった。なかでも国鉄労働組合が、青年部の正式な機関決定によって、二〇〇人の組合員を、組合旗をもって動員したことは、日本の労働者が、本格的にこの日の闘いに参加した代表的なものであった。

「一握りの暴力学生」との非難とはまったく反対に、山崎君は、ここ数年間日本の良心を代表して反戦闘争を進めてきた、学生と労働者の最良の部分の先頭に立っていたのである。その人々の心の中は、佐藤首相のベトナム行きを許すことは、ベトナム侵略に自分が手を貸すことになる、人間として許し難い行為である、との激しい決意で結ばれていたのである。

略を行なう帝国主義国の内部から、自国の侵略に反対して人民が立上る闘いが、ついに世界的な規模で爆發しだしたのである。

このことは、ベトナム戦争阻止の展望を具体的に示したものと見て、歴史的なものといえる。第二次大戦後は、主な国際的問題は、ことごとく米ソ陣営の取引き、話し合いによって決定され、世界の人々のなすべきことは、あたかも東西のいずれに組するかを選ぶのみ、といわれてきた。また、こうした「平和共存」体制が、民族解放闘争の高まりの中でその無力さをさらしだすと、今後は米ソを含めた先進国に対し、後進国―民族解放闘争のみが、歴史を動かす力のごとくいわれだした。しかし、ベトナム戦争は、ソ連のいう平和共存の無力さを示すと共に、中国のいう「周辺革命」論も、決して問題の解決を示すものでないことを示していた。

この中で、侵略戦争を行っている国―帝国主義本国の内部から、自国の権力に反対して立上るその国の人民の運動こそ、歴史をかえりう力として期待され、注目されるのである。十・八羽田闘争は、日本政府の戦争加担に、日本人が命をかけて反対する闘いの先例であった。十・二一のアメリカの闘いは、これをアメリカ本国で、大きく発展させたのである。ここに、永い間忘れられていた歴史を動かす力、その国の内部から、戦争を続ける権力に反対して立上る人民の力を見ることは、今後の闘いにとって何よりも大切なものであろう。

日本の反戦闘争は、全世界の闘いの先頭に位置するものであった。だが十・八は、日本の反戦闘争そのものにも、大きな爪省を迫っている。

十・八は、日本の反戦闘争を世界に示した。だが日本のベトナム反戦の意志が、山崎君の死という、悲しい犠牲をおしてしか、強く示されなかったという事

三、弾圧とデマ宣伝の本質

ベトナム人民に対する、恐るべき殺りく戦争に参加する国は、その国自身の人民に対しても、殺人と弾圧を加えずにはおかない。佐藤首相のベトナム行きが、山崎君の貴い命を奪って強行されたことは、この訪問の正体をあますところなく示したものであった。

八日当日、政府官憲が、反対運動に対して加えた弾圧は、狂暴の言葉以上であった。この日全学連は、あらかじめ羽田空港への抗議のデモを申請していたが、都公安委員会は、警視庁の要請を入れて、一切のデモはもろろん、集会さえ不許可とした。憲法で保障されたデモの自由を不当にも奪い、全学連が羽田周辺に近づくことさえ、あらかじめ禁止してかきり、これを実行するため、三千人近い警官と、近代的弾圧兵器を繰出したのである。

当日、機動隊は、プラスチックマスクのついたヘルメット、警棒、楯で武装し、鋼鉄づくりの巨大な警備車や、水圧で人間をはねとばす威力をもつ放水車、さらに催涙弾をうつつガス銃まで、用意し、空港周辺をとりまいた。空港に入ろうとする人は、早朝からだれかれの別なく検問され、乱暴され、阻止されたのである。また全学連とは別に、デモを申請した反戦青年委員会の労働者に対しても、ほんの形ばかりの道にコーラスをねじ曲げたのである。

こうした弾圧は、しかし佐藤首相のベトナム訪問の危険を知る人々を、いささかも退かせることはできなかった。全学連の部隊は、空港に入る三つの橋において、警官隊と対決し、反戦青年委員会や国労の労働者も、不当なコース変更を拒否して穴守橋のたもとに座込んだ。なかでも萩中公園から弁天橋に向ったマル学同中核派を中心とする全学連主流派の部隊は、公園入

実は、日本の革新運動の深刻な危機の反映であった。たしかに、もし羽田に十萬、二十萬の人々が押しかけたら、山崎君はむざむざ殺されなかつたといえよう。山崎君の死は、私たち一人ひとりに、人間としての責任を問いかえしている。

十・八の闘いは、日本の労働者、学生、市民にそのことを鋭く迫った。そしてこれに応えて、ベトナム反戦の闘いに立上る人々は拡大し、その力は十月二十日の国鉄労働者の「米軍用タンク車輸送阻止」の闘いと、二十一日の大統一行動を盛り上げる力となったのである。

反戦青年委員会は、十三日全国統一行動をもち、東京で七千人、全国數萬人を動員して闘った。国鉄労働者は、八日の羽田に参加した力をもって、十九日から全国二十の拠点で順法闘争に入り、特に二十日には、支援労働者とともに実力で米軍用タンク車の輸送を阻止する闘いに立上った。立川の米軍基地に送られるベトナム向けガンソリタンク車を止めるため、立川と浜安善に、數千人の労働者が結集した。国鉄当局はこの力に恐れをなし、八十輛の貨車の輸送中止を指令したため、ついにこの三日間、米軍基地には一滴のガソリンも運び込まれなかつた。反戦闘争の最も鋭い闘いの一つである、生産点での実力阻止闘争がつかちとられたのである。

こうした闘いを推進したものが、十・八羽田闘争であったことはいうまでもない。九日の朝刊は、駅頭のスタンドから早々と姿を消し、職場で地域で、論議はこの闘いに集中した。今まで無関心だった人々も、ベトナム戦争を考える討論に、大きく引き込まれたのである。十・八闘争は、こうして安保闘争以来の日本の革新陣営に、大きな再編成をもたらしたはじめている。安保闘争以来、分裂と低迷の中にある革新陣営は、国労を先頭に力強く反戦闘争に立上る部分を生みだした

口から阻止線をはった機動隊と三度にわたって対決し、これを打破って弁天橋に到着した。橋の上は巨大な装甲車でふさがれ、警官隊はその隙間からしばしば襲撃してきたのである。だが、学生たちはこの不当な阻止線に勇敢に闘いを挑み、屋根ののぼり、隙間を進み、車をゆすって前進した。そのたびに警棒で乱打され、放水車の水でなぎ倒され、ドブ川に真つ逆さまに突落されながら、なお前進した。ついに、恐怖にかられた警官が逃げだし、警備車が一台、学生たちの手にわたるや、学生たちは警備車を先頭に阻止線を突破、ついに空港内にふみ込んだのである。

阻止線を破られた警官隊は、狂暴の限りをつくして反撃した。学生の運転する警備車も学生たちも、警棒と楯の猛攻に後退を余儀なくされた。逃げ遅れ、取残された学生たちは、報復の狂気かられた機動隊員の餌食にされうちのめされた。山崎君が警棒でうち倒され機動隊の群の中に見えなくなったのはこの時である。そのまま彼は永遠に帰らぬ人となった。権力は、ついに弾圧のために殺人をあえて行つたのだ。

「学生が殺された」の知らせは、たちまち各方面で闘っていた労働者、学生に伝わり、激しい怒りを爆發させた。同じころ穴守橋では、首相が出発してしまつたことを確認し、隊列を整え引揚げようとしていた労働者の部隊を機動隊が襲撃し、おびただしい負傷者を出したところであった。散り散りにされた労働者、学生は、あちこちで虐殺の報を聞くや傷だらけの体のまま、弁天橋にかけつけた。弁天橋は、この日参加した学生、労働者の大部分で一杯となった。殺された仲間、に黙禱をささげた人々は、ただちに反撃のデモで再び空港をめざして動きだした。機動隊は、殺された仲間、の屍を求め、旗を半旗にしてなお前に向う学生、労働者に恐れをなし、ついにガス銃を発射、再度の大弾圧に及んだのである。五八名の仲間がこの日検査され

つある。また既成指導部の頹廢、混迷の中から、新しい革命運動の担い手が、だれであるかを示す分化、再編が、急速に進みはじめている。

この闘いに、権力と一緒に攻め加えてきた共産党は、人々の間で大きく見放され、あまりにも露骨なその反労働者の態度で、人々を驚かした。社会党は動揺を重ね、全学連や革命的左翼に、新しい闘心が集まっている。

この大きな再編の渦中をおして、七〇年安保を闘う力が、どうつくられてくるかが、だんだんと浮び上りつつある。この点で、十・八羽田闘争は、日本の未来に、大きな道を拓いたといえる。

佐藤首相のベトナム訪問は、こうした全世界的な反戦闘争の高まりによって、当初の政治的目的を果すことなく二時間たらずで打ち切られた。吉田元首相の死を口実に、形ばかりの会談と共同声明で早々とサイゴンを引きあげたことは、佐藤首相がその訪問にかけた意図が挫折した証拠にほかならない。佐藤訪問によって、南ベトナムの政権をテコ入れし、日本の参戦国化によって泥沼のアメリカ帝国主義を助けようとした意図は、逆に日本の足下から反戦の火がえひろがり、全世界にひろがることとなったのである。サイゴン訪問の既成事実をもって、参戦国化を承認させ、国民をあげてベトナム侵略にかりたてようとした意図は、逆に日本人の、命がけの反戦の闘いの力を、すべての人々の前に浮き彫りにしてしまったのである。

沖繩問題で大きな矛盾にさらされ、ベトナム訪問で手痛い打撃をうけた佐藤内閣は、十一月の訪米から七〇年安保再改定への強硬な帝国主義的外交路線に、早くも破たんを示しはじめたといえよう。十・八羽田闘争は、七〇年安保をめぐる歴史的闘いの、激しい幕開きとなったのである。

た。

これだけの弾圧にも屈せず、殺されても進む労働者学生は、このため、彼等は一般のデモ弾圧とは異質な、陰險な手段に訴えてきた。すなわち、「学生が学生を殺した」というデマをつくりあげ、この大宣伝によって人民を混乱させ、怒りの矛先をかわず謀略である。

警視庁は、遺体を差押え、遺族の要求する医師、弁護士にさえ見せず、一方的に解剖を強行する一方、検視も終らぬうちから「学生が車でひき殺した」というデマを大々的に発表した。遺体をはじめ、真実に連なるものは一切闇に葬り、ニセの証拠を並べ、大量宣伝で人々の間に先入観をつくりあげる操作が、連日つづけられた。安保以来、とみに強まっていたマスコミへの政府統制はここで大きく力を発揮し、各新聞、テレビは、あたかも警視庁宣伝紙の機軸を呈したのである。

政府官憲、マスコミの一体となった「暴力学生」「破壊活動」「学生が学生を殺した」という大宣伝は、羽田で闘った力に対する、形をかえた弾圧であった。警棒を活字に、催涙弾を電波にかえたこの弾圧は、山崎君を殺したように、ベトナム戦争に反対し、羽田で闘った五千人の力を、この日本の社会から抹殺し、根絶やしにすることを狙つたものである。権力の力だけでつぶせないことを知った支配階級は、これを何か異常なものに仕立てあげ、人民から孤立させ、異常な弾圧が当然なものに見せようとしたのである。

こうした権力の攻撃、なにかんづく権力が自から犯罪行為をつくりあげ、この大宣伝で人民の反抗を庄殺しようとする謀略は、重大な歴史の転機に、しばしばみられたものであった。近くは朝鮮戦争前夜、迫りくる戦争を前に、激しい労働者階級の抵抗を打破るべく仕

組まれた、下山・三鷹・松川の三大謀略事件が、二百万人の首切りとレッド・パージの武器になったことを想起すれば十分であろう。日本のベトナム戦争への加担は、まさにこのした時代に再び入ることを暗示していたといえるのだ。

権力のこの強圧は、殺された山崎君にまで襲いかかった。十四日、全学連は殺された弁天橋の上に、弔いの花を供えるべく、遺影を先頭に現場に向った。だが二千人の完全武装の機動隊は、悲しみをこめて手に手に花をもった学生たちの、肅々とした行進の前にたちはだかり、撲る蹴るの暴行を加え、ついに橋に近づくことすら阻止したのである。また十七日比谷野外音楽堂で行われた山崎君の中央葬には、日比谷公園全体を完全に包囲し、参加者のカバンまで調べ、葬儀屋のもってきた花輪にまで文句をつけ、参加者一人ひとりをサーチライトで照して調べあげるといふ、狂気じみた弾圧を加えた。墓をあばき、葬儀参加者を根こそぎ検挙した、ツアールのロシアや戦前の日本のごときこの弾圧ぶりには、官憲の恐怖と闘いの新しい段階を物語っているといえよう。

さらにこの弾圧に加えて、日本共産党が権力の先兵となつて羽田闘争攻撃の先頭に立ったことも重大なことである。日共はこの日「赤旗まつり」を行ない、佐藤ベトナム訪問阻止の闘いを完全に放棄していた。十八に高まる運動に対しては、あらゆる妨害を加えながら、その力が無視できぬと見るや、形ばかりの抗議団十数人を当日空港に送り、「わが党も抗議した」と称しただけである。

だが、羽田闘争が爆発するや、日共は全力をあげてこれを攻撃するために立上った。「反動と反革命の衝突」と八日の闘いを規定した日共は、自から「反動」の側に立ち、「反革命」攻撃に総力をつくしたのである。九日付「赤旗」に、当日の記録を書いた記者は、

十七日の「虐殺抗議、山崎博昭君追悼中央葬」は、こうした声を総結集し、一大反撃に組織する闘いであった。中央葬は、山崎君の死によって切拓かれた無限の可能性をあますところなく汲みつくし、権力のデマ宣伝から広汎な人々を切離し、十・八羽田を闘った力の回りに固く結びつけるよう、十分な配慮がはらわれて準備された。葬儀は、全学連秋山委員長、故権美智子さん母堂の光子さん、遺族の代理人として、死因追求にあたっておられる小長井弁護士、鶴見俊輔、羽仁五郎氏ら多数の個人と、革共同から構改派、中国派までの諸潮流を含む各種団体をよびかけ人、よびかけ団体としてもたれた。会場には、折からの冷い雨の中を、しかも警官隊の狂気じみた包囲、妨害をこえて、労働者、学生はもちろん、知識人、主婦、高校生、老人など、あらゆる階層の人々一万人が詰めかけ、野外音楽堂は身動きのできぬ満員となった。

質素な祭壇に飾られた大きな遺影と、はるばる上京された御遺族を前に、全学連、反戦青年委員会、友人、教授から、日本社会党、婦人団体、宗教界代表等々が、心からの弔辞をのべた。全学連委員長秋山勝行君は、弾圧にはばまれ集会には参加できず、メッセージが吉羽忠中執の手で代読され、また獄中で黙否権をもつて闘っている五〇名余の同志を代表して、北小路敏元全学連委員長のメッセージが万雷の拍手の中に読上げられた。さらに、九日、機動隊の弾圧のもとで強制測量を行われた三里塚空港反対同盟の戸村委員長と十二年間闘い続ける砂川基地拡張反対同盟の宮岡副行動隊長が並んで壇上にのぼり、闘い続ける者同志の、深い連帯の言葉を語りかけた。また、席上、小長井弁

士は警視庁発表と全く逆の「死因は頭部挫傷」と明記した都の監察医務院の公文書をかざして官憲の謀略を明快に暴露し、参加者一同に深い確信を与えた。この中央葬の圧倒的な成功は、いかなる弾圧、いかなる宣伝も、日本人民の闘いの力をつぶすことが出来ぬことをまざまざと示したものであった。「一部の暴徒」「学生からも完全に孤立」という宣伝をよそに、六〇年安保闘争当時比べても、革命的左翼の力が、大きく前進していることが、はっきりと示された。この中央葬の参加者は、六〇年六月の権美智子国民葬の実に三倍をこえているのである。

「死因に両説がある」と書いた責任を問われ解雇されたという。「赤旗」は連日トロツキスト攻撃に紙面を使い、山崎君れき死説を支援し、権力犯罪の有力な加担者となった。国会では林百郎議員が「なぜ事前に大学を出るところで、学生を弾圧してしまわなかったのか」「なれ合いで学生を野放しにしているのはけしからん」「もつと学内に入って取締れ」等々、自民党もあきれほどの「追及」を行なった。「前衛」の仮面がはがされそうになった日共が、すべてをすてて真に闘う部分に敵対してきた姿といえよう。

こうしたすべては、日本の社会に、本当に新しい変革をもたらす力が登場し、いかなる弾圧、謀略にも屈せず闘い抜いたということが、いかに権力を恐れさせ、またその庇護の下に勢力拡大を夢見る自称「前衛」日共を恐れさせたかを示すものである。人々は、逆にこの激動の中に、新しい日本の方向を探りはじめたのだ。

四、わきあがる反撃の波

十・八羽田闘争が、当日の官憲の弾圧をはねのけて闘いぬかれたことは、全国の労働者人民に力強い激励となった。大々的なマスコミのキャンペーン、追打ちの弾圧は、一層人々の怒りをかきたて、反撃の炎を強めた。

各大学では翌日ただちに抗議集会が開かれ、指導者を奪われ、傷つきながら、ほうたい姿の参加者を中心に反撃戦が開始された。これまで活動から脱落していた人々が続々と戦列に復帰し、東京・京都・大阪で抗議デモが行われた。山崎君の出身校である大手前高校では、十日五〇〇人の後輩が集まり黙禱をささげた。大阪駅頭では、九日夜市民を含めた八〇〇人の抗議集会ももたれた。十一日には京都市役所前で、労働者、学

生の抗議集会が開かれ、京大井上清教授・野村修助教を先頭に市内デモが行われた。十二日には、大阪で高校生二五〇名が独自にデモを行ない、この間、札幌・仙台・山梨・静岡・名古屋・富山・岡山・広島・鳥取・福岡などで、学生や反戦青年委員会を中心に抗議集会やデモが行われた。

十三日には京都大学で学生葬が行われ、京大河野健二、井上清、野村修、同志社大鶴見俊輔各教授ら千三百名が参加し、夜は反戦青年委員会の統一行動に引きつがれた。この日は全国反戦青年委員会の統一行動日として、全国各地で青年労働者の集会、デモが行われ、それが合わせて山崎君追悼、抗議の闘いとなった。東京では、七千人の青年労働者学生が日比谷野外音楽堂をうめつくし、激しいデモを行ない、大阪では大阪総評が一割動員を指令、組合旗をかかげて三千人が参加、雨の中を弾圧をけって闘いぬいた。

一方、連日のマスコミの大宣伝は、一般の人々に少なからぬ混乱をもたらしたことも否定できない。素直に新聞を信じ、学生に食ってかかる人、ベトナム戦争には反対だが、学生もやりすぎではないか、と心配する人、さらにそれを煽りたてる権力と日共の悪意ある宣伝の中で、戦場や地域で討論が湧きおこった。街頭カンパは、たちまち討論集会となり、秋山全学連委員長のアピールが駅頭で配られると、引ったくるようにして読まれた。強烈なマスコミの影響と同時に、羽田闘争の衝撃をおして、ベトナム戦争と自分のかかわりを深く考え直す人々が急速にふえたことは疑いない事実であった。また「十トンの車にひかれれば死体はどうなるか」という問いかけから、官憲の謀略を見抜いた人々は意外に多く、あらためて権力の正体を肌で感じとった。

動揺を続ける社会党も、「社会新報」号外で生々しい当日の写真特集し、人々に強く弾圧の実態を訴えひろがりをつくりだしたものととして、注目すべき前進であった。

十・八闘争は、明らかに権力と人民の、深い亀裂を拡大し、人々をきびしい階級の試練にかけた。共産党のごとく、自己の保身のために権力の手先となるもの正体はこのうえなく鮮明に暴露され、これまでの通念を破つて、労働者人民の立場に立つものとその敵の側に立つものを、新しく示したといえよう。日本の明日を拓く真の力は、この対立をとことんまでおしすすめることによって、一層強くなるのである。

五、問われる反戦闘争の「質」

十・八羽田闘争は、世界的にも日本国内にも、深い衝撃の波をおこした。この波紋は日とともに一層ひろがり、より豊富な教訓をもたらしている。とりわけ、この闘いが二十一日のアメリカの反戦デモに引継がれ、帝国主義本国において、労働者人民の大きな闘いが可能であり、これが帝国主義者の侵略をやめさせる決定的な力であることを事実をもって示したことの意義は画期的であった。

日本の反戦運動においても、十・八は新しい段階を画すものであった。

政府自民党は、マスコミを通じてこの闘いの「暴力化」をさわぎたて、共産党も一緒になって暴力非難を続けている。しかし、こうした論議は、なによりも佐藤首相のベトナム訪問が、ベトナムで連日連夜くりひろげられている、恐るべき殺人、破壊行為一戦争という最大の暴力に一層加担するのだというこを、わざと忘れていく。また、当日あの場だけをみてみると、装甲車、放水車から催涙弾、警棒・ピストルであらかじめ武装し、空港への道をふさぎ、警官に野次をとばしただけでも、撲りつけ逮捕する機動隊こそ、非

難さるべき本ものの暴力である。しかしこの機動隊の暴力は、十月八日に始まったのではなく、安保闘争で樺さんを殺し、安保以来のすべてのデモに対し、これをサンドイッチしておしつぶすという形で、十二分に發揮されていたのである。特に五月二十八日には砂川において、基地拡張反対のデモに襲いかかり、まったく素手のままの学生を警棒で打倒し、岡山大生宮崎健一君に頭ガイ骨陥没の重傷を負わせた。宮崎君は幸い一命は取止めたが、傷のため言語障害になり、今なお入院中である。こうした数々の血の犠牲を払っている学生たちが、ヘルメットや石や棒で身を守るのはあたりまえである。このことは、十四日の献花の行進、十七日の葬儀のデモに対してさえ加えられた機動隊の暴行によって再確認されたといえよう。

戦後民主主義のもとで、戦前の暗黒政治への怒りと労働者階級を先頭とする人民の抵抗によって、多少ともその暴力を制約されていた官憲は、最近では民主的権利も一切ふみにじり露骨にその本性をあらわしている。日本の階級闘争は、すでにこうしたむきだししの対決の時代に入りつつあることを、厳しく認識することが、すべての人々に迫られているのだ。ヘルメットで自衛しなければ、デモもできない時代を迎え、しかし屈することなく進むことが必要なのである。

もちろん、このことは、あらゆる人々の、あらゆる行動が、弁天橋の上での全学連部隊のようになれというのではない。きびしい情勢は力と条件に応じた、あらゆる多様な、創意的な闘いかたを必要としている。十・八の羽田闘争は、橋の上での学生の闘いと、そのうしろに断固として座込んだ青年労働者の行動との、固い連帯によって支えられた。また国鉄労働者は、軍事物資輸送阻止のための実力闘争という、生産点での労働者の闘いをついに表現した。全学連の、何ものをも恐れぬ実力闘争を頂点に、労働者の生産点に

自己の立場を問われたのである。われわれの選択は、戦争に反対する者はその全責任をもって佐藤の出發を阻止すること以外にありえなかった。アメリカの反戦デモの中で、黒人の指導者が「白人諸君は、政府が自分のいうことを聞いてくれないことが判ったから、仲間に入れよう」と語りかけたごとく、われわれは、自分の意志をふみにじて政府が侵略戦争を強行することを知り、これを阻止するために立上ることによって、はじめてその侵略と闘っているベトナム人民と連帯する道を見いだしたのである。

六、羽田闘争を創りだした力

この闘いは、当然にもこれまでの革新勢力——社会党共産党などの既成指導部によってはつくりだせなかつた。十・八の羽田闘争は、革命的左翼の断乎たる決意と、その力量によって、はじめて実現したのである。羽田闘争が五千人の人間によって闘われ、はげしい波紋をなげ弾圧にさらされたことは、二つの意味をもっている。

一つは、日本の革新陣営——既成左翼指導部の混迷墮落が、この闘いを孤立させ、弾圧の前に、山崎君の貴い命をむざむざと失わすことになったこと、そして革命的左翼の力も、それを阻止しえなかつたことである。社会党・共産党・総評から、いわゆる進歩的知識人たちまで、これまで日本の革新陣営を背負ってきた指導的勢力が、厳しくその責任を問われるのは当然である。社会党は、野党第一党として、人々に佐藤ベトナム訪問の真意を暴露し、闘いをよびかける責任をまったく放棄していた。かつてのように、口先だけにせよ闘いをよびかけ、形ばかりにせよ行動を提起することさえ、しなかつたのである。闘いの直後、現場の雰囲気につき動かされて出された「一切の責任は佐藤に

おけるストライキ闘争を中軸に、広汎なひろがりをもつたあらゆる人々の多様な闘いが結合される中にこそ、反戦闘争の巨大な発展が待ちとられるのだ。例えばベ平連の、市民だれでもが参加できるデモも、こうした結合の中で、広い闘いのすそ野をつくるのである。

こうした、全人民的な闘いの結合は、全学連の行動を「暴徒」「はね上り」と攻撃し、権力と共にこれを指弾する者と徹底的に闘うことなしには、決して実現しないものである。日本共産党の「民主勢力の統一と団結」論は、自からの無行動、権力の許す範囲での形ばかりの運動をもって全学連の闘いに対立し、すべての闘いを否定しさうとするものであり、この日共の態度こそ、全人民の闘いに分裂をもたらす凶凶なのである。

羽田の闘いなどをつきつけられると、「ベ平連のデモなら良いが全学連は……」としたり顔に批判する者が必ず出てくる。だがそういう人間に限って、「ベ平連のデモ」にさえ、ただの一度も参加したことがないものだ。木村官房長官は、「国民的共感をもった皆さんのケースと違い、今度は世論もきびしく……」を語った。しかしこれほど破廉恥なことはない。今、羽田闘争を攻撃する者は、清水幾太郎のごとき変節者以外は、同じ語調で六・一五に敵対した者たちなのである。どんな形であれ、ベトナム反戦の闘いに身をもって参加し、また参加しようとする人々は、決してこうした態度はとらぬものである。人民の、政府、権力に対する闘いは、その人がいかに逃れたいと願っても、きびしい権力との対決を避けることはできない。そして、権力が許すワクの中でのだけの行動では、佐藤が許すことだけをやっていたのでは、決して権力をもつ者の行動に打撃を与えることはできないのだ。羽田闘争は、国家権力の行為を阻止する——佐藤首相のサイゴ

あり」という党声明だけが、辛うじて革新の名を保ったほどだ。総評もまたしかりであった。ここでも、国鉄労働組合青年部の八日羽田参加、そして二十日の軍事輸送阻止の闘いが、大総評の面目を辛うじて支えたといえよう。日本共産党は、「赤旗まつり」で当日の闘いを放棄したばかりでなく、権力の手先となって羽田闘争を攻撃する先頭に立ち、スターリン主義党の恐るべき反労働者の本質をあますところなくさらけだしたのであった。革命的左翼は、こうした力の前に、羽田のあの闘いをつくりだすが勢一杯であった。

だが同時に権力の弾圧と、既成指導部の退廃、日共の攻撃に抗して、革命的左翼が羽田に五千人の労働者学生を結集して闘いえたこと、その後の弾圧を謀略の嵐に屈することなく、力強い反撃を組織していることは、それ自身新しい力なのである。

社共の指導をのりこえ、ソ連中国への幻想を断ち、ロシヤ革命以来の労働者階級自己解放の闘いをめざす、革命的左翼の運動は、わが国において早くも十年の才月を経てきた。特に六〇年の安保闘争において、公然とその存在を示して以来七年、多くの挫折や曲折をこえてそれは前進してきたが、七〇年を三年後にひかえた十月八日、ついに羽田においてその姿を大きく再登場させたのである。人々は、支持すると敵対するとかかわらず、ベトナム侵略に反対し、佐藤政府の戦争加担に、最も徹底して対決し、闘う者が、だれであるかをはっきりと知った。既成左翼をこえた若い力が、最も鋭い変革者として立上っていることを見た。そしてその力が、ただ理念のみでなく、現実存在するものとして、しかも日本の社会をゆるがし、世界的な波をおこしうる実体として登場したことを知ったのである。

安保闘争で華々しく登場した「全学連」に代表された革命的左翼は、安保闘争の敗北以来、分裂し、四散

ン訪問という——ためには、目の前に立ちはだかる敵の壁を、力をもって打破ることがどうしても必要なのだということを、はっきりと教えているのである。一切の変革の道が、革命の始原的問題が、山崎君の死とおしてきびしくつきつけられたのだ。

このことは、ベトナム反戦闘争に、質的な深化をもたらした。日本の革新運動が、ともすれば「抗議」「反対」の意志表示にとどまり、自己の全存在をかけて歴史の流れを変えようという厳しさに欠けていたことが、鋭くつきだされたのである。十・八に羽田に集った人々は、佐藤のベトナム行きを、あくまでも阻止する決意にもっていた。これは、戦術論議をこえて、ベトナム反戦運動に対する自己のかわりかたに連なるものであった。

昨年の十・二二反戦ストなどをおして、日本の反戦闘争の中に鋭く問われていた問題は、「日本の労働者人民としての主体的責任」であった。反戦闘争を闘う中で、多くの人々は、日共のように「悪いのは米日反動、われわれもベトナム人と同じ被害者」「ベトナムへの同情・支援」といって、自分を第三者に仕立て、ベトナム戦争を対岸の火事とみる考え方を克服してきた。日本が、アメリカの侵略に深々と加担している以上、われわれが何もしないで生活していること自体、ベトナム侵略に加担していることではないか。共に被害者どころか、歴史の中ではわれわれも侵略者、加害者ではないか。同情どころか自分で自分の立場を覆えさぬ限り永久に侵略をやめさせることはできぬのではないか。こうした立場が、ベトナム反戦闘争に新しい鋭さを要求したのである。佐藤のサイゴン訪問は、この問題をズバリとつきつけた。公然たる参戦国化にふみだすことを、許すか否か、佐藤榮作が、日本国首相として、日本国民の総意と称して戦場に行くことを、黙過してよいかどうか——まさに日本の人民一

し、死滅したといわれてきた。日共はトロツキストの死滅を大々的に宣伝し、三〇万の党勢をほころ日共こそ、唯一の前衛であると自称してきた。だが、たしかに分裂し、四散しながらも、革命的左翼は着実に自己を鍛え、その力をのびしてきたのである。

十・八羽田に結集した力は、たしかに安保全学連をこえる量には達していなかった。だがその中味は、七年の才月の間に大きく前進していた。全学連の鋭い闘いを可能としたのは、三千人の、はるかに強く思想的に鍛えられた学生活動家の存在であった。またその後ろに続いた、二千人の青年労働者の存在であった。六〇年の安保闘争時には、ほんのわずかの労働者しか、公然とは全学連の隊列に続くことができなかったのだ。七年の間に、革命的左翼の闘いは深く労働者階級の本隊の内に根をおろし、反戦青年委員会の活動を支えて羽田に結集させるまでになった。さらに国鉄労働青年部が正式に組合決定で参加したことは、この闘いがついに日本の労働運動の中軸を動かしたはじめたものとして、歴史的重みをもったのである。

これは、ただ十・八に突然生じたものではない。なによりも七年間の闘いの中で、革命的左翼が一層純化され、思想的に強固なものとしてうち固められてきたことと、その立場で、広汎な労働者人民を結集し闘いに立上らせる、柔軟な組織戦術を身につけて成長してきたことによるのである。六五年の日韓闘争は、反戦青年委員会を生みだし、続く原潜闘争は、一層労働者の内に、闘う力をのびすものとなった。

この力が、急速な拡大をよびはじめたのは、昨年の十・二二ストを契機とするベトナム反戦闘争の発展、なかならず今年に入ってから諸闘争の展開にあった。革命的左翼は、反戦闘争を軸としつつも、多方面にその闘いをひろげ、その経験をとおして自己を責任ある階級闘争の担い手に鍛えたのである。

今年二月二十六日、ベトナム戦争への協力のため、二年間阻止されてきた砂川基地拡張が強行されようとしたことに対し、反戦青年委員会と全学連は、断乎たる実行行動に立上った。砂川基地拡張反対同盟の人々は、十二年前の勝利をもたらした本場の力の再登場を見て、心から固い握手を送ってきた。この闘いは、五月二十八日には日共の分裂行動をはねのけ、七月九日にはついに総評、社会党を動かす、砂川での大統一行動を実現せしめたのである。八月六日には、原水禁運動の分裂退廃をよそに、広島に闘う青年労働者、学生を集め、十月反戦闘争の決起を誓い合ったのだ。

一方、この闘いを支えてきた部分は、四月の統一地方選挙に東京・杉並区において自からの代表をおして参加し、特に地方選挙の政治的焦点であった都知事選挙に、美濃部を勝たせるための大きな力となった。革命的左翼が、その闘いを幾百万都民の中にもちこみ、日本の階級矛盾の焦点をなしつつある都市問題に取組み、あらゆる戦線において責任ある革命政党としての存在を示したことは、内外に大きな反響をよんだ。この闘いのうえに、東京都交通局合理化と料金の値上げが社共両党の卒先した支持によって強行されようとしたときは、ただ一人、断乎として反対の闘いを組織したのであった。

こうした闘いの中心を支えたのは、安保以来の苦闘に耐えた全学連の学生であった。昨年十二月、ついに全学連の組織再建をなしたとげたわれわれは、続いて明治大学の学費値上げ反対闘争において、委員長が全学生を裏切るといふ危機を許したが、それをのりこえ、秋山委員長の下に、真に全学連の伝統にふさわしい闘う体制を確立した。民青、革マル両派の妨害と、内部の動揺分子をかかえつつも、全学連は秋山委員長を先頭に、この間の諸闘争の牽引車となつて闘い抜いてきたのである。安保闘争当時とは比較にならない弾圧の

もどで、しかも早大・明大・高崎経大等々と続く大学そのものへの攻撃の下で、全学連はベトナム反戦闘争を闘い抜く先頭の座を守り抜いた。特に、十月反戦闘争の高揚を前にして、法政大学に加えられた二八五名検挙という空前の大弾圧にも屈することなく、十・八羽田闘争は切拓されたのである。

革命的左翼は、十・八を闘い抜いたことにとどまてはならない。十・八闘争は、それを担った人々に新しい訓練をつきつけている。権力は、ついに再登場した全学連と革命的左翼の力を、根こそぎつぶすため、その攻撃を集中してくることは必至である。特に、学生運動に対する学園内外からの攻撃は、これまでとは全く性格を異にする厳しさをもちつつある。反戦青年委員会を中心とする青年労働者は、はじめて本格的な権力、資本家との死闘を迫られるであろう。マスコミは、これまでの「黙殺」という対応を一変させ、「暴徒」「破壊分子」という大々的宣伝攻撃に移った。この攻撃は、広汎な大衆の間に新しい流動化をもたらしている。さらに日共は、その全活動を「トロツキスト」攻撃についに、権力と手をたずさえたあらゆる手段に訴えることは必至である。権力とスターリン主義という、前後からの集中攻撃の中で、革命的左翼は、日本階級闘争を担うに足るものか否かを、大きく問われるのである。

だが、苦難は人を玉とし、烈火と槌の打撃は鉄を鋼に鍛えあげる。真に闘うものは、あらゆる攻撃を一身にうけて屈することなく、なお広汎な人々を、たくみに組織し、すべての闘いを有効に発展させる責任を負わねばならぬ。十・八羽田闘争を転機として、荒れ狂う弾圧と、逆に一挙に拡大した革命的左翼への注目、期待とは、われわれに一層の飛躍の好機を与えているのである。

全世界の人々が、日本のベトナム反戦闘争に注目し

ている。全国の人々が、羽田で闘った学生・労働者に注目している。権力に屈して後退することはやさしく、ただ自己の一撃を自慢していることもやさしい。だがわれわれは、自らが切拓いた地点にしっかりとふまえつつ、日本の労働者人民の主力を、その地点に引あげ、さらに新たな地平を拓いて進まねばならないのだ。

一九七〇年の安保再改定をめぐる闘いは、まさに日本の帝国主義権力と、これと闘いうるただ一つの真の力としての革命的左翼の対決として、すでにその火蓋を切ったのである。十・八羽田闘争の鋭さを一層とぎすまし、十・二〇国労軍事輸送阻止の闘いの階級的骨格を強め、十・一七国民葬に結集した大きなひろがりをもさらにひろげて、われわれは前進せねばならない。山崎君の霊は、この足音を待ち望んでいるのだ。

(三六ページより)

以上のべた点のほかに、われわれはさらに多くの問題点をもっている。権力はあくまでも「れき死説」をふりかざして、「ひき殺し犯人」を仕立てあげようとし、最近では「運転免許をもち、当日羽田に行った可能性のあるもの」を片っぱしから調べる方針という。こうしたやり方は、逆にいえば何の証拠もないのに、あくまでも犯人をつくりあげようとしていることなのである。

われわれは、山崎君の死因に重なる、奇怪なぞをさらに追及し、官憲が自分達の手で殺しておきながらそれを学生の責任にすりかえ、弾圧の中心理由におこうとする謀略を必らず打破り、山崎君の霊にこたえた。真相を一番よく知っている山崎君は、その口を開けないのだ。

労学呼応した数時間の死闘



十・八羽田闘争の記録

十月八日、佐藤首相の南ベトナム訪問をどんなことがあっても阻止しようという決意を固めた闘いが、四千を越える機動隊を動員した国家権力の激しい弾圧に抗して最後まで断固として闘われた。今回の佐藤首相の、全国民の反対を押し切つての南ベトナム訪問は、日本がベトナム人民を公然と敵にまわし、ベトナム侵略戦争への参戦国として決定的な歩を進めることを意味していた。この佐藤首相の南ベトナム訪問を、なすすべもなく、だまされて見すごすならば、日本の労働者人民のこれまでのベトナム反戦の広汎な声も全く空虚なものとなってしまったであろう。十月八日の闘いは、アメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争に反対してきた日本の労働者人民の、どんなことがあつて

もやり抜かなければならない闘いであったのだ。「日本の参戦国化を許すな」「佐藤首相の南ベトナム訪問を阻止せよ」というスローガンのもとに、この日の労働者学生五千の闘いは闘われた。これまでベトナム侵略戦争反対の先頭に立ってきた全学連(秋山勝行委員長)と、反戦青年委員会(日韓闘争の中で生れた、総評・各労組青年部・社会党・社青同・全学連・各地域の反戦活動団体・活動家による組織)は、この日全力をあげて羽田での抗議闘争に取組んでいた。全学連・全国反戦青年委員会はもちろん、国鉄労働組合青年部なども正式に羽田闘争を決定、また社会党系諸団体や「ベ平連」などの各種平和団体も、共に八日の羽田闘争に取組んできた。八日羽田に集った人々は、この全体であった。政府・警察当局は、この日のデモを一切禁止し、機動隊四千人以上を出動させ、警備車・放水車から警棒・タテ・催涙弾を使って弾圧の限りをつくした。この弾圧によって、京大大学生山崎博昭君が弁天橋の上で警棒でメッタ打ちにされて殺され、学生・労働者数百人が重軽傷を負い、五十八人が検挙された。佐藤首相は、この死の弾圧に護られてベトナムに出發した。

十月八日の行動は、①萩中公園に午前八時前から集まりはじめた「反戦青年委員会」(以下「反戦」と略記)を中心に、これと連帯しつつ独自に闘われた全学連(秋山勝行委員長)の闘いと、②独自に京浜線羽田空港駅から稲荷橋で行なわれた革マル派の闘いと、③空港内で行なわれた社会党、日中協会などの行動の三系統に分かれており、そのなかでも闘いの中心は「弁天橋」と「穴守橋」という二つの場所にあった。

まず午前八時前、空港に通ずる高速道路の鈴ヶ森付近に、社青同・社青同解放派を中心とする学生部隊が突入、警官隊の阻止線を破って座り込んだ。しかし三十分あまりで、増援にかけつけた機動隊は、学生をごぼう抜きして暴力的に排除し、引抜かれた学生部隊は、一部は空港付

近の穴守橋に、一部は萩中公園に再結集した。

萩中公園では、八時前から東京・神奈川・埼玉をはじめ、各地方からの反戦青年委員会の労働者が続々と結集、また国防、動力車、東交の労組青年部が組合として結集していた。またここには「民学同」系の学生部隊、共産主義労働者党・統一社会主義同盟や各種平和団体の人も集まり、九時ごろにはすでに千名をこえる結集を見ていた。

一方、この日の闘いの最も中心的な担い手となるべき、全学連主流派の部隊千五百名は、八時半過ぎ京浜急行大鳥居駅前

装甲車占拠、空港に迫る

弁天橋

千五百の主流派学生、死を賭した勇敢な戦闘

弁天橋に到着した全学連主流派の部隊千五百名は、ただちに橋の上の警官隊と対決、警官は橋上の五台の装甲車の後に退いた。学生は装甲車に迫り、ついに先頭一人がよじのぼり、屋根に立った。学生の隊列の中にどよめきがおこる。次にのぼる学生。革命的共産主義者同盟の真紅の旗が装甲車の上にひるがえる。一丸となった学生の軍団がそれにつづ

く。官憲は恐怖し、狼狽した。装甲車の上から迫る勇敢な学生に対してやがて激し

で萩中公園にむかう。九時少し前に革共同の大きな赤旗、各大学の自治会旗、マルクス主義学生同盟（中核派）の赤旗を先頭に並びかせ、萩中公園に到着。反戦青年委員会の労働者たちの拍手をうけながら公園のなかをデモで行進した後、隊列を組み直し、総指揮の全学連中執・情宣部長青木忠君を先頭に、そのままだちに弁天橋に向う。

まず萩中公園出口の十字路にしかれた警官隊の阻止線を一瞬に突破し、次いで穴守神社付近にしかれた第二次の阻止線とぶつかり、約五分でこれを粉砕、弁天橋に到着した。

い放水で対抗した。だが、全身ずぶぬれになった車の上の学生も後続の部隊も、全くひるむことなくふみとどまった。この間、別の警官隊数百は全学連主流派の後方から攻撃を続けた。最初は突破された第二阻止線の機動隊が隊伍をととのえて攻撃、後には新しく増強された部隊が三度にわたってハサミ打ちを狙った。全学連主流派は約五十人を後方防衛のために配置した。「機動隊が来た」の報に、装甲車の前の学生は色めき立ち、防衛隊の方へ行こうとするが、防衛隊にとどめ



られる。「機動隊が何百人こようとも、ここはわれわれだけで必ず防衛する。諸君はこちらへ来ないで装甲車に向って闘ってくれ」。そして襲いかかる機動隊の前に、しばしば後退させられたが、けっしてひるむことなく一気に退勢をばん回し、おし返した。機動隊は何度も襲撃を試みたが、強力な防衛隊の壁を破ることはできなかった。

装甲車の上の先頭の学生が後を向いて右手をあげ、機動隊の頭上に飛びおりていった。「降りてくる学生は全員検査せよ。全員検査せよ」と警察のマイクが一段とポリウムをあげる。二人、三人と学生がとびおりる。だが、待ち構えた警官によって一人ずつつかまれ、こずきまわされたあげく逮捕され、つれ去られる。この決死の闘いに驚いた官憲は再び放水車を装甲車の上の学生に近づけ、屋根のあげふたから顔を出し、銃のようにつきでたホースから泥水を猛烈な勢いで放水した。車の上の学生たちは必死にからだをふせたが、激しい水圧におされて、ある者は橋の上に転落し、ある者は下の海老取川へまっさかさまにふき落とされた。

学生は再び態勢をととのえた。左側の車にむかつて猛然と殺到、中にのついていた機動隊員はあわてふためいて車からとびおり、逃げ去った。

「こちらは全学連主流派、こちらは全学連主流派」——突然、性能の良いマイクの声 flowed。装甲車を奪ったのだ。

どつと起こる喚声。すぐそばの四階建ビルの二階から、屋上から、鈴なりの住民の共感の拍手、どよめき。

「ついに来るべきときがきました。われわれは歴史的な勝利へ歩を進めました。今から全学連主流派は佐藤訪ベトに抗議して、空港の中にはいります。全ての学友はこの車につづいて進撃してください。……われわれは人殺しの協力をすることはできません。佐藤をベトナムに行かせるわけにはいきません。全学連主流派は闘います」。

学生は一層闘志にみちた前進を開始した。学生の装甲車は速度をあげてバックし、向う側の放水車に突進した。ズブツと向うにおしやられる。ひととき高い喚声と共に、学生はつづいて奥へ。そして再び前に戻り、バックして突進。放水車の後退、学生を応援する付近住民の興奮はますます高まる。官憲は斜め横の放水車を使用して運転席横の窓から猛然たる放水で応酬、反対側の窓から水がほとぼりしり出るほどの殺人的な水圧である。だが、「負けません、負けません。われわれはどのような弾圧にも決して屈しません」と、再び機動隊に向って突進、二度、三度、四度目の衝突でついに車を橋の向うにおしやることに成功、勢いにのつて学生は橋を渡りきるところまで前進、空港内の機動隊と鋭く対峙した。これに対し機動隊が猛然と襲いかかり、学生は後退させられたが、この時、車と橋のらんかんの間に多くの学生が取りこまれた。





羽田空港への突入めざして、全学連主流派千五百名は弁天橋上で必死の闘いを展開した。マル学同京大支部の旗が見える(写真右)。勇敢な学生の抵抗にたじろぐ機動隊(写真左上)。恐怖、ただ恐怖のみを紐帯としている彼らは、正義の抵抗に無差別の暴力をふるうのだ(写真左下)。



逃げ場を失って下のドブ川に飛びこむものが続出した。鈴なりの見物人がこの惨状を見ていたが、溺れる学生を見てその場で服を脱いで飛びこみ、泳いでいて助けくれた住民が何人もいた。回を重ねるにつれて、あらかじめパンツとシャツ姿で岸に立ち、助けにいく人がふえた。山崎博昭君はこの時、車の間にとり残

反戦委二千にも大弾圧

穴守橋

全学連に連帯した
青年労働者の闘い

萩中公園では、全学連の部隊の出発後にやっと全国反戦の集会がはじまり、全国反戦、総評青年部・社会党・各地区反戦代表から、それぞれあいさつを受けた後、九時半ごろデモで会場を出発、荏原製作所前をとって穴守橋に向った。

穴守橋では、すでに結集していた社学同、社青同派の部隊と萩中から行った学生部隊によって、橋の上につくられた装甲車の阻止線をはさんで、警官隊と投石等の応酬が行なわれていた。全国反戦・構改派系学生・各組合・団体の部隊はこの後方に付いて橋に向って座り込みに入った。社学同・社青同解放派・社学同M.L派・構改派などの学生部隊で約一千名、「反戦」組合、各団体で約二千名、合計三千名をこえる部隊が橋に向って座り込み、その前で社学同派の学生が阻止線をはさんで闘いに入った。

された一人であった。ここで彼は機動隊にかこまれ警棒でメッタ打ちにされ、殺されたのだ(十一時半ごろとみられる)。その後、警官に囲まれた装甲車が学生の方に引き寄せ、学生は再び突入したが、「学生が死んだ」ことが伝わり、一時闘いが停止された。この間に橋の上は再び車でふさがれる。

これよりさき、京浜線羽田空港駅から出た革マル派の学生部隊三百名は、九時前、稲荷橋にしかれた警官隊の阻止線に突入、装甲車のバリケードを築かれて対峙状態に入り、阻止線をはさんで応酬が続く。

空港内には八時ごろからモノレールやバスで入りこんだ人々約四百が詰めかけていた。このうち、社会党代議士や総評代表など二百名は、ロビーに集まっており、数人の共産党・民青・民青「全学連」代表もこれに混った。

ベ平連、日中友好協会正統などの代表二百名は、ロビー入口に座り込んだり、空港突入をはかったりして闘っていた。九時半すぎ、穴守橋に到着した反戦、組合、各団体、構改派の学生部隊の前で、社学同、社青同の学生部隊百人ほどがバリケードの装甲車を丸太でゆさぶり、ロ

ープで引くなどして動かそうとしたが果さず、そのたびに後ろの放水車から水をぶっかけられ、さらに車のバリケードは厚くされた。十時半ごろ、一番手前の装甲車が炎上させられたのを手始めに、五台の装甲車が次々に火をかけられ、つづいて稲荷橋の二台も炎上した。

この間、伝令によって刻々伝えられる全学連の弁天橋の闘いは、各反戦の中に話され、闘いを支える最大の力となった。これに対し、機動隊が羽田空港駅をとって後方から攻撃するためやってきたが、稲荷橋のところで革マル派学生部隊がこれを阻止、いったん引きあげた警官隊は後方を回って、荏原製作所前から道路半分を占拠して対峙した。

十一時半ごろ、全国反戦指導部は引きあげを決め、反戦、組合の部隊は立上って最後尾からデモを開始し、革マル派の学生部隊も稲荷橋を引きあげてこの後についた。構改派の学生部隊がデモで後方から進み、反戦のデモの先頭に並んだ。この襲撃で、荏原製作所前に待機していた警官隊は一斉にこのデモに襲いかかった。この襲撃は、先頭から最後尾まで、すべての部分に対し、真横から一斉に襲いかかる形で行なわれ、警棒をかざしてなぐりかかる警官隊のためデモは寸断、部隊はバラバラになって路地に逃げ込んだ。この襲撃で、反戦関係のおびただしい負傷者が出たのである。ここでも、負傷者は路地裏に逃がれ、住民の手で護られ助けられた。

できなかつた。

これらの部隊が弁天橋に結集し、山崎君の虐殺に対する抗議集会をもった後に抗議行動に入ろうとするや、機動隊はまたも警棒をぬいておそいかかってきた。今度は催涙弾が使われた。続けざまにデモ隊のなかに催涙弾が打ち込まれ、白いけむりがたちこめる。それを合図に機動隊がデモ隊にむかってつっ込んでくる。機動隊は、ガスで目、鼻、口をやられ、逃げおくれた学生、労働者、さらに付近の住民にさえも無差別にリンチを加え、大量の重軽傷者、逮捕者が出る。

こん棒をふりかざした機動隊に追われ、路地裏まで逃げこんだ労働者、学生たちは民家に救いを求める。ほとんどの家がすすんでかくまってくれる。血だらけの学生、泥靴のままの労働者も住民に快く介抱される。

二時すぎ、傷つき、つかれきった学生、労働者の部隊は、萩中公園に引きあげたが、その途中は機動隊が辻を固め、引きあげていく学生、労働者に対して暴行と検挙を重ねた。

他の部隊からしばらく遅れて、この日の闘いを終始先頭に立って闘い抜いてきたマルクス主義学生同盟京大支部の赤旗を先頭におして、全学連主流派の部隊が萩中公園に帰って来る。

ちりぢりになっていた部分も合流し、反戦青年委員会もこれに加わり、集会もたれる。

全学連秋山委員長、吉羽中執、山崎君

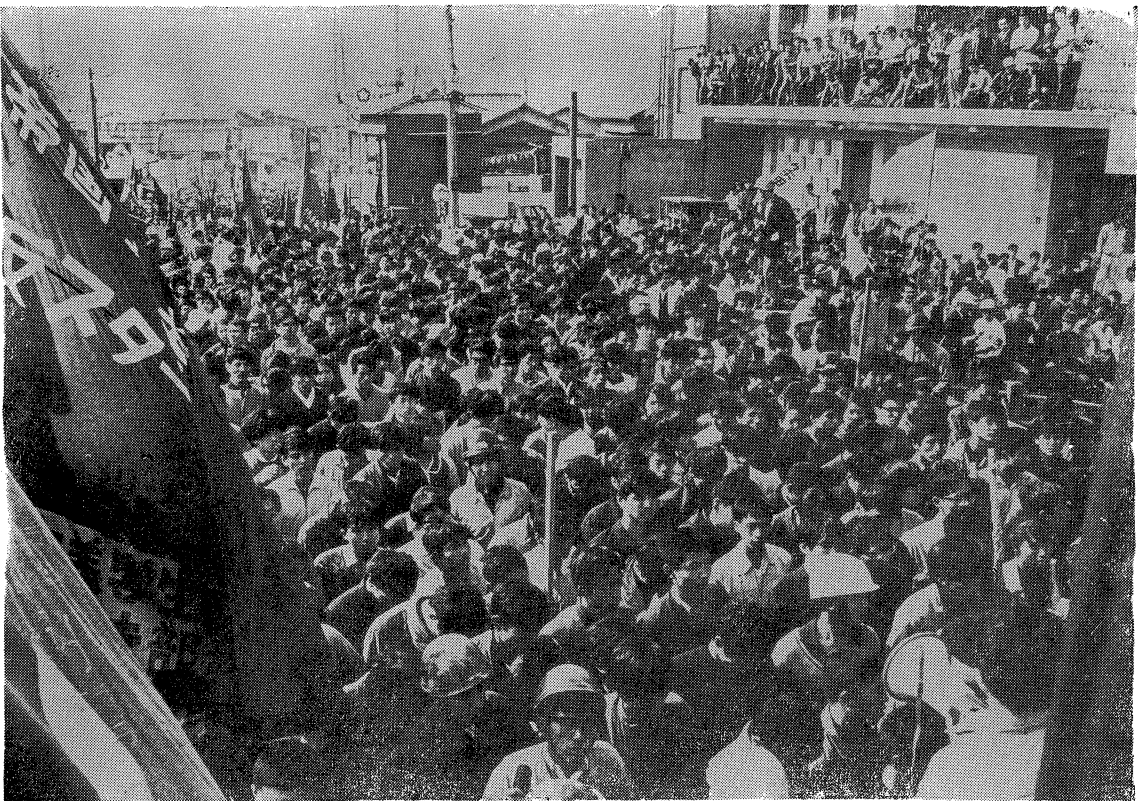
この最中に、「弁天橋で学生が殺された」ことが伝えられた。寸断された部隊が、再結集されていく中で、このニュースは伝えられ、ただちに各部隊は弁天橋へ向って動きはじめた。

しかし社青同解放派の指導部はこのニュースを信用せず、独自のレポを出したら、そのレポは「そんなことはない」と報告したといつて、弁天橋からの訴えを拒否し、萩中公園に向ってしまった。

萩中公園には、退散された人々が集まり、それぞれの集団ごとに集会を開いた。「学生死亡」のニュースは全員に伝えられ、各部隊ごとに「弁天橋へ」の声が高まった。全国反戦の指導部会議が現場で開かれ、今後の方針が協議された。国労と動力車の一部から「数寄屋橋に直接集まっている組合員もいるから、予定通り銀座へ行くべきだ」との意見が出て若干もめたが、それも各団体で行なうこととして、全員が弁天橋へ抗議集会に行くことに決定した。反戦の宣伝カーから山崎君虐殺の報が伝えられ、怒りは一層高まり、各部隊は続々弁天橋に向った。

まず、構改派の学生部隊と各団体が出発、神奈川、東京の反戦が続ぎ、その後から社学同、社青同解放派の順で弁天橋に向った。革マル派の部隊はついに抗議集会に参加しなかつた。また国労青年部の部隊は、数寄屋橋のカンパと弁天橋の抗議集会に部隊を分け、労働組合として正式に抗議集会に参加したが、行く途中で機動隊に阻止され、橋まで行くことが

とともに上京しこの日の闘いを一緒に闘った京大の学友、そして反戦の労働者の仲間が次々に立って「山崎君の貴い犠牲に応え、さらに闘いを前進させよう」と決意を述べ、山崎君を殺したブルジョアジーへの復しゅうを全員が堅くちかい、さらに巨大な闘いに向けて、それぞれの持ち場で闘いを進める決意を固めて解散した。



山崎君の死は全世界の人々の魂をとらえた

十・八羽田闘争の波紋

声 明

昨日、佐藤首相の南ベトナム訪問を阻止するために、羽田空港付近の学生デモ隊の中にいた京大文学部一回生山崎博昭君が警察機動隊と学生との衝突現場で殺されました。彼の直接の死因が何であったかについては警察側と学生側との見解が対立しており、私たちは正確な判断の材料も未だ持ちあわせていません。しかし、彼の直接的死に対する責任がどちらの側にあるにせよ、彼の死の本質はもつと別のところにあると私たちは考えます。

私たちはベトナムに対するアメリカの侵略を悪だと考えず。佐藤首相の今回の南ベトナム訪問の目的は、このよ様なアメリカの悪に対する新たな積極的な肯定と援助にあったと私たちは考えます。佐藤首相は自らの目的を遂行しようとしており、彼山崎君はその不正な目的を阻止するために多くの学生たちとともに自らの死を賭けたのでした。このかたんなる事実の中に問題の真実があると考えます。私たちは、このような状況をつくりだした佐藤政府こそ非難すべきだと考えます。同時に、私たちは彼山崎君を死にいたらしめた責任の一半を私たちも含めて京都大学そのものも負うべきだと考えます。

私たちは、彼山崎君の死を悲しみと怒りといくらかの恥ずかしさをこめて、彼が目的としたところを、京都大学の目的とすることを、私たちの立場を考へて、教職員と大学院の皆さんに訴えます。
一九六七年十月九日
京都大学教養部 林 功三
理学部 尾里建二郎
三枝 寿勝

10・8羽田デモについての呼びかけ

よってきたる問題の本質を明らかにする責任を逃れて、裏切りの態度をとり一部にあつては、十月八日身を挺して行動したものが自己の批判勢力であることの故に、権力側のキャンペーンと軌を一にする暴力分子呼びわりをしています。
わたしたちは、以上のような事態の本質を見がすことではできないと考えます。わたしたちはすでに、わたしたちの日常のみせかけの平和がベトナム戦争と構造的に深くかかわっていることにより、目に見えないベトナム人民の血で日々自分の手が汚れていることの痛恨をもってきましたが、その痛恨において十月八日に流されてしまった山崎博昭君のつぐなうことのできない同じ色の血が欺瞞的なキャンペーンの的になるのを許してはならず、現在踏み出されつつあるベトナム戦争加担の重大な一歩がその陰に隠されるのを許してはならないと考えます。

この意志表示に多くの労働者、知識人、学生が加わって下さるよう呼びかけます。

佐藤首相の南ベトナム訪問に反対する十月八日の全学連、反戦青年委員会等の羽田におけるデモ以来、それが官憲と衝突したところにかかわって、政府宣伝、商業新聞、テレビをはじめとする全報道機関をあげての大キャンペーンが続いています。また一部の知識人の意識的、無意識的な発言がそれに協力しています。

わたしたちは、このキャンペーンの意図するところは、きわめて欺瞞的なものであり、しかし、それに導かれてつある状況は危険なものだと考えます。

それは一切をあげて問題を学生の暴力という一点にしぼりあげ、あの日、他の誰もなさなかつた佐藤訪ベト阻止の行動をとった人々を、暴力分子にしたてあげることによって、その陰にわたしたちの権利である示威表現の自由を圧殺する国家権力の暴力と、なにより佐藤首相の南ベトナム訪問というわが国の実質的なベトナム侵略戦争加担のモメントを画する支配層の行動をかくそうとしています。

十月十二日 発起者

- 岩田 宏 石田 郁夫 長田 弘夫 黒田 喜夫 野村 修 天沢 退二 江川 栄夫 岩田 宏

声 明

- 林潤光 岡本清 石田郁夫 秋田徳夫 徳留和弘 小寺平弘 長田正弘 粕田三平 山田のり子 英老木竜生 海老坂武 大沢真一郎 菅原克郎 篠田浩一 鈴木道彦 津野喜太郎 黒田真吉 三木真卓 山際永弘 吉野菊二 山下善之 福田善之 野村善之 土本俊夫 松本俊夫

佐藤首相の南ベトナム訪問に反対する学生の行動をめぐって、政府の声明、マスコミ、ニケーション、機関の報道には、私たちとして見のがすことのでき

ない危険があらわれている。「学生が暴力団のようになった。これに対するきびしい弾圧は当然である」として、学生運動批判に国民の注意を集中させ、学生の反対行動の的となった首相の南ベトナム訪問の性格をかくしてしまおうという態度である。
戦争を体験した日本人として、ベトナム戦争に反対することは自然の感情であり、自分たちの政府がこの戦争に協力することをあきらめなく思うのも当然の判断である。
今、首相が、これまでの戦争協力を一歩進めて、南ベトナム政府に友好的訪問を行うことはつよい抗議に値する政策であると思われる。この政府の処置に対して、学生ははげしい行動をもって抗議した。その抗議の仕方に行きすぎがあり、そのゆきすぎは批判されるべきものであつても、抗議についての批判は、抗議の対象となつた日本政府の戦争協力についての批判と相殺されるべきものではない。また国家権力によって武装された警官の暴力と学生肉体的行動による抗議とは、冷静に比較するならば、その暴力性において同じ程度のものではない。そのことを、参加者は知っており、目撃者は知っており第三者としても推定できる。
私達は、国家の政策に対する人民の批判の権利を守りたい。もし今、政府の声明やマスコミ、ニケーションの報道が良識の名においておこなつてくる学生非難に同調して、学生を見すておこなうならば私達自らが国家批判の権利を開放することになる。

今日日本の政治のもとでは、首相の南ベトナム訪問に反対する声が、日本人の間にあることを世界に知らせることも、一人の青年の死をもたらしただこの不幸な事件をまづはじめて実現した。学生の行動は、このような日本の状況と見合つたコミュニケーションの形なのであつて、私達は学生の行動の行きすぎを批判するだけでなく、それに百倍する力をもって、日本の政治に対して抗議したい。
羽田事件についての声明と報道とをうけて、私たちは、政府ならびにマスコミ、ニケーション、機関に対する批判の意志をあらにすると同時に、今回の学生行動にたいしては、署名者のあいだにも、さまざまな批判や意見もあるが、学生のベトナム反戦の目的にたいしては連帯の意志を明らかにしたい。
十月十四日

- 梅本 克正 大井 健三 小川 政三 小田 秀雄 小田 切四郎 陸野 正取 久野 正取 小島 輝正 佐多 稲輝 柴田 好翔 竹内 好翔 鶴見 俊行 鶴見 俊行 名和 良一 羽仁 一郎 林高 五郎 日高 六郎 堀田 善衛 水戸 善衛

動揺するアメリカ帝国主義支配層

ベトナム、アメリカ人民に強い激励

八日の全米連、反戦青年委の羽田闘争は、「六〇年安保以来の最大の闘い」として、全世界に巨大な衝撃を与え、とりわけベトナムそしてアメリカ人民の反戦の闘いを力強くはげましていく。

全米のラジオ、テレビは八日朝のトップニュースで羽田闘争をつたえ、イギリスBBC放送、タイムス紙、中国新華社、北京放送、さらにパキスタン放送などが闘いを報道している。

とくにアメリカ政府への打撃は大きく、国内の反戦闘争への激励、世論への影響をおもなばかつて、一当局者が「きわめて悪いニュースだ」ともしたことが伝えられている。「アジア唯一の安定した先進工業国」と政府が宣伝していた日本でのこのような激烈な闘いの爆発は日本人民大衆の意志の強さをアメリカ人民にはっきりと示した。

一方サイゴンでは、「佐藤、血の出発」という見出しで羽田闘争を伝え、南ベトナム訪問をめぐる日本国内の深刻さに注目している。

イギリスのタイムス紙は「山崎君の死は日本全国に動揺を与えている。こ

の暴動は佐藤首相の外遊の全目的をゆさぶる結果となった。激しい政治的反響が起ることは避けられまい」と論じている。

また、北京放送は「勇敢な日本の学生は、佐藤の南ベトナム訪問に断固として反対した。二百人あまりの学生が負傷し、山崎昭昭という名前の青年学生は壮烈な死をとげた」と報じている。

「学生が学生をひき殺した」という日本支配階級の悪らつなデマ、故意にベトナム反戦から切りはなし「暴徒」として印象づけようとキャンペーンをはっているマス・コミの反動的試みにもかかわらず、十・八羽田闘争は世界人民に、日本労働者、学生、人民大衆の強い反戦の意志をあますところなく明瞭に示し、アメリカ、ベトナムにおける反戦の闘いに強烈な連帯の意志を表明したのである。この闘いは、山崎君の虐殺にたいする世界的衝撃を十・二一国際反戦デーへむけ、巨大な反戦闘争のうねりを作りあげていきつつある。

なお、革共同・国際部では、世界の反戦諸組織、革命諸組織にたいし、電

報をうつなどキャンペーンを開始した。

(十月九日「前進」三五四号)

米の「反戦」あおる

羽田デモ・ワシントン当局懸念

【ワシントン八日共同】佐藤首相の南ベトナムなど東南アジア訪問第二次旅行出発のさい、死者まで出す激しい抗議デモが発生したとの報道に、米当局者は改めて日本の反ベトナム戦争感情の強さを認識すると共に、こうした日本での激しいベトナム戦争抗議の国際的波紋、特に米国内でこれまでになく高まってきているベトナム戦争反対運動、ハト派議員の和平要求に新たな材料を提供する結果となることを懸念している。国務省の「当局者は八日朝「極めて悪いニュースだ」と語った。

ワシントンにこの報道がはいったのは土曜日深夜のため新聞にはまだ取り上げられていないが、ラジオ、テレビのニュースは、八日朝から「佐藤首相の南ベトナム訪問反対で死者まで出す大デモ」と繰り返し報じた。

これまで一部を除いてほとんど知られていなかった佐藤首相の南ベトナム訪問がデモで一躍クローズアップされた形となった。

米軍当局は、佐藤首相の南ベトナム訪問に野党、学生団体からの反対運動だけでなく、肝心の自民党内でさえ、公然と異論が出ていたことを知っており、また先日発表されたマンスフィールド上院総務の訪日報告でも、その広範なベトナム戦争反対ムードが指摘されたばかりで、多少の国内まさつは予想していたようだが、死者まで出す激しい実力行使にまで発展するとは見通していなかったようである。

イギリスでも

【ロンドン】白井特派員九日【八日の事件は、英国で大きな関心を集めている。九日も各紙朝刊は警備車が炎上している写真とともにこの事件を報道しており、タイムス紙は同写真を一面に大きく掲げた。

タイムス紙は、これを「一九六〇年の安保騒動以来、最悪の暴動」と評し六〇年の暴動のあと佐藤首相の兄の岸氏が辞任に追込まれたこと、今回すでに社会党が佐藤退陣を要求している事実などを伝え「激しい政治的反響が起ることは避けられまい」としている。「日本人は人命を重視しない」と外国人はとかく考えがただが、これは誤りで、きよりの山崎君の死は日本全国に動揺を与えている」と同紙は報じている。

(十月十一日、朝日)

サイゴン大学学生連合が

日本全学連との共闘を声明

【サイゴン支局十日】十日、サイゴン大学学生連合の一執行委員の署名入りで「佐藤首相の南ベトナム訪問に反対し、日本の学生と連帯してベトナムの平和と独立を守るために戦う」という声明書が発表された。同連合を中心とする学生たちは、さきの南ベトナム大統領選挙無効要求デモと無届記者会見でホー・フー・ニェット同連合委員長ら約四十人が逮捕され、十数人は直ちに徴兵延期を取消して軍に編入されるなど、きびしい試練期に立っており、

未逮捕の執行委員も警察当局の追及を受けていると伝えられる。声明はサイゴン市内で内密に開かれた臨時執行委員会で、佐藤首相出発時の羽田流血デモ事件に対する態度を話合った結果、明らかにされたものとい、佐藤訪問反対を述べたあと「南ベトナム学生指導者の不当逮捕に対する抗議について、日本の学生の支持を呼びかける」と結んでいる。

(十月十一日、毎日)

民族解放戦線、羽

田闘争に感謝表明

南ベトナム民族解放戦線

カイロ駐在代表

レ・クアン・チャン氏談

佐藤首相の場合は、実際の戦争に参加していない国からはじめての首脳の訪問であり、このためにこの訪問は特別の意義をもっている。佐藤首相が

チュウ、キの徒党に率いられるサイゴン政権との会談を望むかぎり、かれの訪問はベトナム民衆の間に日本政府の政策に対する深い憤りと疑惑を巻き起こすだけであろう。これこそ日本で佐藤首相のベトナム訪問に抗議する大規模な集会やデモが爆発的に起こった理由だとわれわれは考える。われわれは佐藤訪問に反対する日本国民の英雄的行為をたたえ、かつこれに感謝する。デモのさい死亡した学生の家族には心からおくやみをいいたい。

(十月十一日、読売)



10・21 ワシントン反戦デモの示したもの

アメリカ帝国主義の心臓部に真紅の炎

十月二十一日、ワシントン反戦デモは、全国四十七州、六百の大学から集めた学生を主力とし、高校生、教授文化人、宗教者、家庭の主婦までも包含し、すべての平和・反戦団体の参加のもとに闘われた。この闘いは、ベトナム反戦闘争に、そしてアメリカの階級闘争に、重要な意義をもつものである。

十月八日、羽田で全学連、反戦青年委員会が命をかけて発したベトナム反戦の叫びは、十月二十一日、ワシントンにおける二十万の流血デモによってこたえられた。

今や、世界のベトナム反戦闘争は、そしてアメリカの階級闘争は、全く新しい段階に突入した。ベトナム侵略戦争の兵站基地日本であげられたのろしは、アメリカ帝国主義の心臓部において真紅の炎となって燃え上ったのである。

ベトナム反戦の声は少数にすぎない。

い、と強弁して来たアメリカ支配階級は、その「少数」から、国防総省を守るために、二万の軍隊をワシントンに動員しなければならなかった。しかし勇敢なデモ隊は、つきつけられる銃剣をもとせせず、流される血をふみこえてベトナム侵略戦争の最高司令部・ペンタゴンに突入した。恐怖したジョンソン政府は、催涙弾を発射し、六百名のデモ隊を逮捕するという挙に出た。

ジョンソンを明らかに敵視

ベトナム侵略戦争に反対するアメリカ人民は、これまでの平和的デモから決然と一歩すすんでジョンソンを明らかに自らの敵と呼び自国の国家権力と対決する闘いへと立ち上ったのである。アメリカ政府が、自国の民衆の反抗にたいして、軍隊をさしむけたのは実に三十五年來のことである。大恐慌

のどん底で、手当を要求してワシントンに集まった失業軍人の群に、ダグラス・マッカーサーひきいるところの正規軍が襲いかかったのは、一九三二年であった。

今、「豊かな社会」を誇るアメリカ資本主義の政治的中心地で、「国防総省実力封鎖」の決意を固め、ペンタゴンを包囲した二十万のデモにたいし、国家権力は銃をかまへ、棍棒をふるってたちむかう以外に、なすすべを知らなかった。数年来ワシントンは、何回か大きなデモの波を見て来た。六三年夏の「仕事と自由を要求する」黒人大衆の行進、六五年春、北爆反対の大抗議集会など。これらの運動を平和裡に見過して来ることできた米支配階級は、全国各地で徴兵事務所封鎖の実力闘争を闘い、バス、特別列車をつらねて首都に結集して来た巨大で強力なデモ隊に今までのデモとは質をこととした重大な決意を見てとり、言い知れぬ恐怖を感じたのである。

弾圧の最前列に立ったのは、デトロイトの黒人反乱にたいし、残忍な銃弾を打ちこんだベトナム帰りの悪名高き第八十二空挺師団であった。ベトナム人民の血を吸い、黒人の頭をぶち割った汚れた野獣が、今度は白人大衆に襲いかかったのである。ベトナム・デトロイト・ワシントン、今やアメリカ帝国主義者はその爪の先に痛撃を喰い、内臓をおびやかされ、心臓に迫る切先に恐怖し出している。

「白人の友人諸君、君たちは君たちの部署で闘いを起してくれ、それをおしてこそ、われわれと諸君の連帯の道はひらけるであろう」—ブラック・パワーから投げかけられたこの激しいアピールにアメリカ人民は今や呼応した。「偉大な社会」—アメリカ資本主義には、階級闘争は存在しないという神話は、アメリカ人民自身の手によって粉砕された。デトロイト、ニューヨークをはじめ全米六十八都市をゆり動かした黒人反乱を、アメリカ人民は黙って傍観していたわけではなかった。黒人大衆の白人支配機構にたいする憎しみをこめた、天をこがす炎を見つめながら、白人大衆は、自らの心の中に、支配階級にたいする闘いの火をもえ立たせていたのだ。

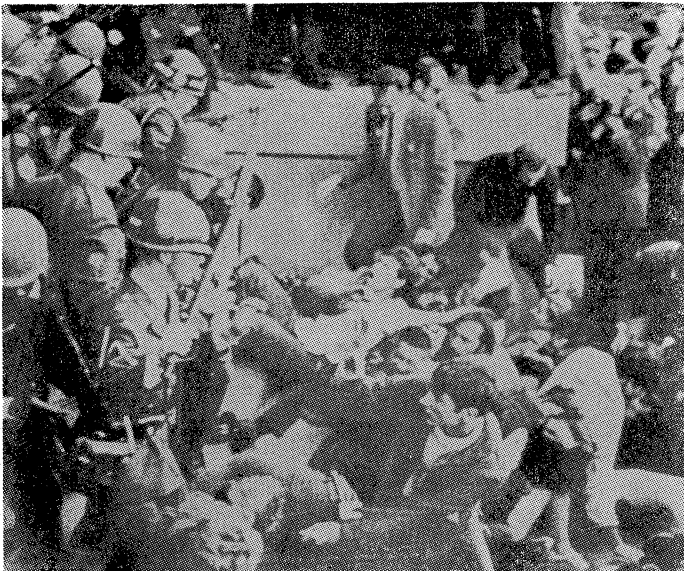
六〇年安保闘争時において、想像しえなかったような事態が、今やアメリカ社会のただ中に生じている。学生を主力とする二十万の決起は、数千万労働者のあらかゆる歪曲をこえて自らをつらぬくものである。ちなみに、ワシントンデモの中には「打倒米帝国主義」の日本語のプラカードがみられた。

十・八から、十・二一への闘いによって、ベトナム—日本—アメリカ人民は、アメリカ帝国主義にたいする闘いにおいて、固く結ばれていることをそれぞれの血をもって示したのである。

ベトナム侵略戦争反対の闘いは決定的にあらたな段階をきりひらいた。十月二十一日ワシントンデモ、日本における国鉄労働者の米軍軍需物資輸送拒否闘争と全国百五十万の集会を最前列とし、ヨーロッパ各地で、大衆的デモが闘われていることは、十・八羽田闘争を突破口として、激動する政治過程が全世界に開始されたことを物語っている。とりわけ、西ベルリンにおける一万のデモは、「西ドイツにはプロレタリアートは存在するか？」などという論争の行なわれていたこの国で、容易ならぬ事態が起りつつあることを示している。

ベトナム人民の闘いとむすんだ先進国、とりわけ日米労働者人民の実力闘争をつうじた階級的連帯こそが、ベトナム侵略戦争を阻止する真の力であるというわれわれの数年來の一貫した提起は、われわれ自身の闘いを通じて、今や現実となりつつある。

七〇年闘争は、太平洋の兩岸ですでに開始されたのだ。



働者の嵐のような進撃の前ぶれでなく何である。昨年、ジョンソン政府のガイドポスト政策（生産性ののび以下に賃上げをおさえる）を地下鉄、鉄鋼などの闘いをつうじて実力をもって打ちやぶったアメリカ労働者階級は、今年、四十六日間の自動車労働者のスト、十四日のニューヨークの教員スト、今なお十四週間にわたってつづけられている銅山のストライキなどの闘いに立ちあがっている。アメリカプロレタリアートの戦闘性は経済要求をめぐる闘争をつうじて徐々にたかまって来て

深刻な危機迎える米帝国主義

ワシントン流血デモの圧倒的感銘は、これらストライキを闘っている労働者を中心として、全労働者階級の胸の中に力強く焼きつけられつつある。その坐りこみストで、大恐慌直後の全米をゆさぶったCIO（産別労働組合会議）の英雄的な闘いの記憶は、未だ労働者階級の脳裏から消えてしまっていない。

比類のない戦闘性を発揮しながらも、革命的指導の欠除、組合主義的限界ゆえに、第二次大戦にたいする反戦の闘いを行いえず、体制内にひきずりこまれてしまったCIOの痛切な経験をのりかえて、アメリカ労働者階級がすすみうるか否かが、今問われている。

疑いもなく、アメリカ帝国主義は、戦後最大の、否、大恐慌以來もっとも深刻な危機をむかえつつある。何人もゆるが

山崎博昭君をしのいで

弟へ

山崎 建夫

死

虚脱感と、総てへの不信感が
俺の心を覆うんだ。
虚脱感と不信感。
過去のお前を語るのには詮ない事、
死者を偲んで嘆いても詮ない事。
死は悲しみを乗りこえる所に意義を持つ。
お前の死は俺達の心に生きる。

対面

羽田・弁天橋という名は、
生涯俺の脳髓に、消えぬ烙印となった。
死の瞬間、お前の意識は、
肉体に別れを告げた。
弁天橋上で肉体に別れを告げた。

○その後(一)

羽田・弁天橋という名は、
生涯俺の脳髓に、消えぬ烙印となった。
そこでお前は何を考えた。
機動隊と対峙して。
その瞬間、十八才と十一ヶ月の余りにも短かい命のつぎる時に。
死顔……何も語らぬ死顔が、
それでも恨みと口惜しさを語る。

口惜しかったろう、
口惜しかったろう、
お前の口惜しさを思うと、
死際を想起すると、
口惜しくて、怒りに燃える。
佐藤の奴め！ 機動隊め！ と、

だが、永遠に、お前の忌み嫌った俗化した大人になる事はない。
お前は安らかに眠れ。
生き残った者が、怒りをぶつける。
お前の命を奪った奴に。
お前は生き続ける。
お前の死を、
心で身体で受けとめた人々の中に。
お前一人の死は、
多くの、真の平和の為に戦う人々を生み出した。

けれどお前には英雄の呼称も、
犠牲者の呼称もふさわしくない。
敢えて勇敢な行為と讃えるなら、
それは戦った人総てに対して。
敢えて犠牲者と呼ぶなら、
それはいわゆる無関心の犠牲者。
それは再び戦争の泥沼へ日本をひきずり込もうとする
反動勢力の犠牲者。

九日。俺の目の前に曝されたのは
意識の遊離した肉体——物。

生前の着衣を確かめた時、
最初の悲しみと憤りが襲った。
お前の物でしかない顔に接した時、
更に憤りと悲しみが襲った。
その顔が何を訴えているか、
考える余裕は無かった。

異様に口を開け、空を眺んだ
やや面長な顔が。

保存上であろう。鼻腔と口につめられた
白い綿が面相を不吉に感じさせる。

そこには厳肅なイメージとしての、
或いは恐怖のイメージとしての
死というものはなかった。

何ともあつけない、簡単な死——肉体があっただけだ。
虚脱感の所為かも知れない。

解剖に平静で立ちあえたのも、

お前が既に物でしかなかった事と
俺自身の神経が異常になっていたからだ。

だが一本の髪の毛が、

空を眺んだ眼が、過去の記憶に繋る時、
俺は耐えられなかった。

そう呼ぶよりも、俺はお前を、

(再度使うが)未熟なりに、

己の信念を貫いた男——そう呼びたい。

親馬鹿ならぬ兄馬鹿のそしりは

甘じて受けよう。お前の為なら。

○その後(二)

羽田・弁天橋という名は、
生涯俺の脳髓に、消えぬ烙印となった。

はからずもお前の死は

無気力なフーテンと

平和を希求する学生達を

同一世代であるが故に

同次元のものと見なして

あれは一種のはしかさ"等と言ひ

のうのうとして茶の間でテレビを見ている人々が、

結局はフーテンと同じ人種だという事を知らしめた。

はからずもお前の死は

大新聞が政府おかかえであり、

いわゆる世論というものが、

新聞の見出しによって作られ、

何とか評論家や知名人の言葉の枠を

これっぽっちも出るものではない事を、知らしめた。

だが考える人々、心ある人々の力も、
決して小さくはない事を教えた。

○願う事(一)

大人の方々、

戦争を体験された方々に。

「お前達若い者に戦争の事など、
わかるものか」等と言わないで下さい。

若者達との対話を拒まないで下さい。

心ある若者達は、青二才なら青二才なりに、

悲惨で残酷な戦争に、
自からを、家族を、同胞を、
再び、巻き込まない様に必死なのです。

この泰平の世にばかばかしい等と
言わないで下さい。

ベトナムへの軍需物資が

日本で作られている事は御存知でしょう。

我々は、血に汚れた手で、

平和をむさぼっているのです。

自衛隊適格者名簿(即、徴兵名簿)が

かつて全国で作られた事も御存知でしょう。

「小選挙区制って何だい」と、

子供に聞いてやって下さい。

ベトナム戦争に反対する人々が国民の七二%に及びながら、

日本の政府がそれに反対の声明を出せないのは何故でしょう。

それは、安保以前に七二%の内容が問題だと思っんです。

「ベトナム戦争反対」というのは体裁のいい事ですし、「戦争反対」

というのは非常に人道的な行為だから、多くの人がそう考え、

叫ぶのでしよう。だがそれだけに終るから七二%の中味が

空虚になる。

その空虚さが弟を死に追いやったのです。

僕自身、その空虚さを作っていた一人なのです。

願う事(二)

——学生運動に参加している方々へ。
弟の死について、

中学生、高校生、大学の一般学生、そういった方々から

「弟さんは私達の為に戦ったのです。平和の為に戦ったので

す。何もできない(或はしなかった)自分が恥づかしい」と

いった意味の御手紙を頂きます。

この人達が大学へ入った時、学生運動に接した時、多くの人

人はその分裂抗争に幻滅するでしょう。

お互いに他派を、政府とグルだ、右翼と手を結んでいる等

と罵倒し、敵視する事に懸命になりすぎて、本当の戦うべき相

手と戦う時、各々の力を分散し、弱めてしまっている。

右翼結託者がいると仮定するなら、他派を罵倒する精力を、

右翼結託者の摘発に注ぐべきだ。

自身の上部を良く見て、内部にいるならつまみ出し、相手

の上部にいるなら追い出して、学生は共に手を握るべきだと思

うんだ。

——思想のささやかな差をも明確にして、純粋なもののみ

よる統一をはかるべきである。結合の前に、まず分離が必要で

ある——

前半、理想論。思想のささやかな差で、いがみあっている

間に敵に乗せられては何にもならない。

分離の時刻は終わったのではないのか。

一人の死は、結合の契機となるには余りに小さすぎるのか。

僕は夢想する。

——総ての学生、総ての労働者を含めた

民主勢力、革新勢力の団結を。

○最後に弟へ

お前は言っていたっけ。

同じ死ぬなら、戦争で死ぬより、

反戦の戦いで死ぬって。

心から平和を願う人々の心に

細々と、しかも消える事のない

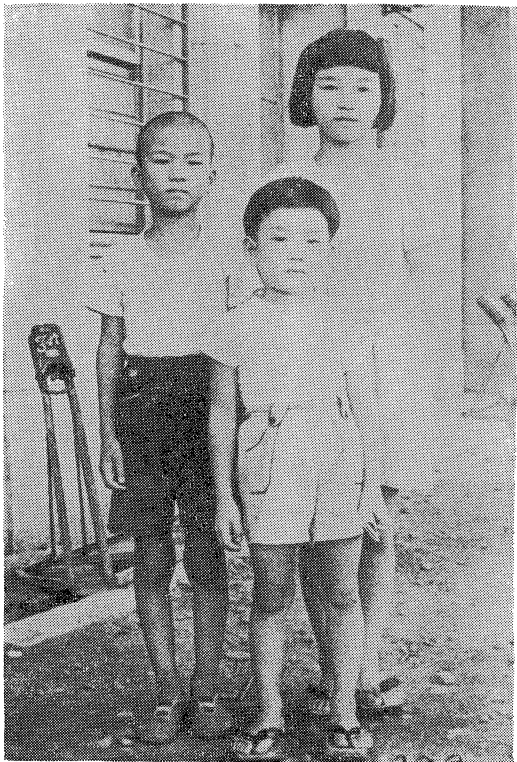
灯りとなったお前を、

俺は誇りに思う。

山崎博昭君の生いたち

一九四八年十一月十二日午前三時頃、高知
県長岡郡大豊村にて、父山崎義昭と母春子と
の間に、長女悦子、長男建夫につぐ次男とし
て生まれる。当時父は農業に従事していた。
事情により五一年頃、大阪市生野区に転居
する。

さらに、五二年十一月、大阪市城東区鳴野
町に転居し、ここで五五年四月、大阪市立城
東小学校に入学する。



1954年9月満5才 姉、兄と



右 1955年1月、満6才
両親・姉・兄と

上 1955年10月、小学校1年
伊勢・五十鈴川付近にて

私は一体何をして生きて来たのだ。現在にすら責任をもたず、未来に対する責任もなく、ひたすら懷疑と無関心の間を揺れ動き他人の言葉で自己弁護をする。この私は一体誰だ。

○僕には勇気がないという事は分っています。分っているという意味は本当には分っていないのですが、そうすればいいはずだという意味で分っているのです。僕は本質的に日和見なのです。勇気をもって一方を肯定すれば他方からの攻撃。ようするに僕は生きてゆく資格がないのです。弱い人間なのです。

彼は夜、話し込んだ友人と別れをつげ一人電車通りをうつむきかげんにあてもなく歩き出した時、街の騒音と、ネオンの色のまぶしさに心がふとさびしくなつた。

心のさびしさが一人彼につぶやいた。

A 人間は全部弱いんだ。それでもだよ。ここが肝心の心だ、それでもだよ、人間は努力するんだよ。仏様の最後の言葉知ってるかい。「休まず努めよ」っていうんだよ。僕は人間は生きてゆく上でどうしても罪を犯さなきゃならんと思ってる。かといって、生きなければそれはそれ以上の罪なのだ。僕達の生は罪の浄化のためにのみ意味をもつんだよ。

原始時代の略奪から現代の戦争に至るまで人間はその生の一部をどうしても罪悪のために用いなければならぬ。また、そうすることによって生を保持し、また生はその罪悪の浄化のためにのみ用いら

れるのだ。矛盾なんかしていない。我々は死んではならないという一点においてこれは真実なのだ。差し引きゼロなんてものじゃないんだ。生が現存したというのが意味をもつんだ。

B 君は今までの歴史を単に何らの分析もせずに単なる感想を述べ、それに努力せねばならないといながら生が現存することに意味がある等とすこしおかしいよ。

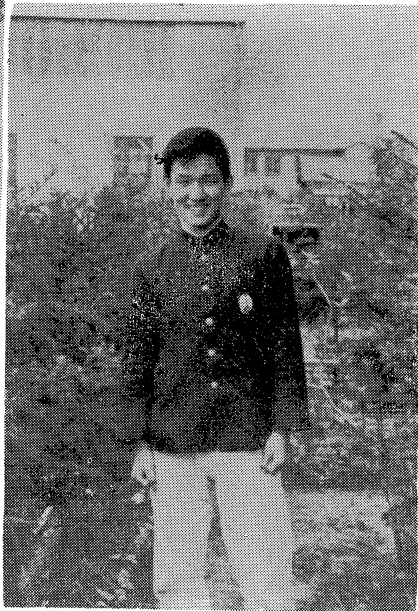
A 僕は現存するってことに、努力するって事を入れたんだよ。そしてその人類の生を生によってあがなうという行為を美しいと思うんだ。

B 君は君はね。罪をオブラートにつつんでいよ。君は罪と罰を離している。君に罪の觀念がある以上、君は人間を超えた絶対者を考えているのだから。いやそれなしには君の論は立たないんだよ。そして又科学の立場に立てば罪なんてないことも言っておこう。

しかし、いまも君のその何ともはや、陳腐な思想のもつ偽善性をアバカネばならない。汝殺すなかれが成立するのならそれは一体誰が決定したことなんだ。

人間の動物的本性からすなわち種族保存のためだなどというエセ科学じゃ君は納得しないだろうし、当然否定するだろう。そもそも殺すなかれが永遠不滅の戒として存在するという観点から君は話しているのだから、君は絶対者を念頭においているといわざるを得ないね。

ところで、すべての人間を超越し、



右 1962年 中学2年生 自宅にて
上 大手前高校の身分証明書

一九六一年四月、大阪市立茨田中学校に入学、六四年三月卒業し大阪府立大手前高等学校を受験し、合格する。

山崎君の死を悼んで

樺 俊 雄

権力者の意図が暴力的となり、暴力が合法性の仮面をつけるとき、人民はその意図を破るのに暴力的となる。権力者の暴力によってきづつき、生命をたれた若者もおお暴力的だと非難されねばならぬのか？

権力者の計略が狡猾となり、暴力者によって世論がまげられるとき、心ある者は立ち上って世論を正さねばならぬ。権力者に追従する者、権力者を倒すジュエスチアを示すにすぎぬ者、彼らのみにくい仮面をはいだのは山崎君の死だ。

権力者が権力をもち、意図を失わぬかぎり、変革者の仮面をつけた者が戦わぬかぎり、若者たちが立って戦わざるをえないだろう。

だが若者の流した血はベトコンの血と一体となってやがて権力者を倒すだろう。

山崎君の霊よ

その時の到るのを待つて静かに眠りたまえ。

(右の詩は、権俊雄氏が山崎博昭君追悼中央葬に寄せられたものです)



1965~66年 高校時代

- 右上 2年生の自治会祭・正面のベトコン・スタイルの仮装
- 右下 3年生 高校野球の応援中
- 左上 3年生 友人と大阪城にて
- 左下 3年生の自治会祭
右端セーラー服で「核実験反対」

山崎 義 昭氏

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

殺さる。十八歳。

反戦・自衛官入学拒否闘争を闘う。

砂川闘争、八・六広島反戦集会に参加

十月八日、羽田空港での、佐藤首相ベトナム訪問阻止の闘いに参加、有能な指導者として活躍中に国家権力によって虐

殺さる。十八歳。

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

殺さる。十八歳。

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

殺さる。十八歳。

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

殺さる。十八歳。

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

殺さる。十八歳。

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

殺さる。十八歳。

御遺族の住所 大阪市城東区茨田諸口(まつだもろぐち)町一四六五ノ一二三

人間に対して戒を示した絶対者はすべて人間の理性に反するという点において、その存在理由を持っているのだよ。

僕はキリストを念頭においているのだよ、あの使徒伝の矛盾。奇蹟の数々。神の死。人間のよみがえり。愛といひながらあの厳しさ。君は心理学でもってあの聖書を読みたまえ。憎悪がいかに神を創造したかが分るだろう。いや君に僕がいたいのは、これ程までに理性に反する神なるものへの信仰を君が持っているかどうかということだ。君どうだ。罪の存在は絶対者なしには成立しないのだ。

C までよ、A君は最後に、それが美しい、からと言っているんだよ。罪悪さえ、彼の場合、一つの美を構成する要素をなしているのさ。そうだろう。

A ええ、まあ。
B じゃ、なぜ罪悪だなんて言葉その

ものが存在し、君はそれを使うのか。殺りにくく対して。

A それは、みにくいからです。
B みにくいものが美の一構成要素という古いテーゼか。結局君の帰結は。

C そうじゃないよ。彼の思想は自己を完結しているようだが、少し、問題になる所がある。それは、罪の浄化の努力を現実的にはどうするかという問題だ。そういう意味でB君の始めの言葉は正しかったと思う。

B (君は自分の立場を明確にした方がいいよ。)

永遠に罪悪はなくならないという観点から、それでもその浄化のためあらゆる手段をとってみるといふ態度が必要と思ふが、A君どうですか。

A 僕もそう思います。

山崎君の日記を読んで

大江健三郎

戦没学生の手記のすぐれたものを読むたびに、心を打たれる二つの性格がある。ひとつは、「戦争の時代」の矛盾や困難を、自分の赤裸の心にまっすぐ受け

とめ、引受けて、それを自分の倫理の問題として考えてゆこうとする態度である。もう一つは、「戦争の時代」の外的条件によって引起された心の緊張が、愛

とか未来への望みや不安のような、内的に根ざすものと、まさに同じ深みにまで深められていることである。この戦没学生は、自分がどのように死んでゆくことを、あらかじめ知っていたようだが、と不思議な感銘を受けて嘆息するのであるが、それは、若者が、彼に死をもたらすかもしれない外的条件の圧迫感を、彼の生の根源において受けとめていたことによるのである。

羽田で死んだ学生の文章を読んで、あらためて彼の魂が、戦没学生たちの優秀で素直な魂の列に、そのままつらなるものであることを感じる。お前は、死んだ学生を神聖化してみせるのか? という声が発せられるかもしれない。僕は、たとえば次のような言葉を死んだ若者のノートに読む時、暗然として辛い心でうつむいてしまふ、ということこそをいっているのである。

B じゃ、なぜ罪悪だなんて言葉そのものが存在し、君はそれを使うのか。殺りにくく対して。

A それは、みにくいからです。

このノートに記された若々しい自意識は、深淵な勉強家の、すなわち望ましい一般学生のものである。そのような学生が一人死に、数々のそのような学生たちが、傷ついて逃げまどったのが、あの羽田の「暴徒化」と非難されたデモであった。

学生運動の活動家の教条的な雄弁は、

山崎博昭君をめぐる官憲の謀略

学生を犯人に仕立てる大謀略を粉碎せよ

つくりあげられた「れき死」のデマ

一、意識的な政治宣伝

「れき死説」のつくりられた経過

警視庁は、山崎君を殺害した直後から、「学生が奪った装甲車でひき殺した」という説を、一方的・計画的に宣伝している。この警察発表にもとづき、各新聞・ラジオ等は一斉に「学生がひき殺した」との大宣伝を行なった。今日でも、報道の大勢はこの方向でますます強められている。だが、これは真つ赤なりそであり、官憲が計画的につくりあげた謀略である。

この「れき死説」は、官憲が十・八羽田闘争全体を弾圧する中心をなしている。むしろ、この「れき死説」を軸に、官憲の全弾圧体制が政治的につくりあげられている、というべきである。警察は、第一に、「ひき殺し犯人」の追及を中心に捜査・検挙を行なうと言明し、事件をそうしたものとしてつくり出している。第二にこれによって山崎君殺害の真犯人はもろろん、官憲の弾圧・暴行の一切を消し去り、逆に学生を「暴徒」に仕立てる切札としている。第三に、「樺さん」の場合とはちがう」といふ官房長官談話のように、安保闘争以来の政治闘争に対する、権力の弾圧という、十・八羽田闘争の基本問題を消し去っているのである。

警察は、一般に一度決めた自己の方針を、それが誤りとわかった後にも、なんとか貫き通そうとする傾向が多く、捜査のミスを隠すことは、多くの被害者によって話されている。「徳島ラジオ商殺し」など一般の事件でも、官憲の手で無実の罪に泣くケースが少なくない。まして政治的事件の場合には、あらかじめ予定された路線にそって、事件が仕組まれ、「犯人」が仕立てられ、弾圧の道具とされることは珍しくない。「大逆事件」など戦前の事例はいうまでもないが、戦後の民主主義のもとにおいてすら、下山・三鷹・松川の三大謀略事件を筆頭に、警官がオトリになった学生事件や青梅事件・白鳥事件など、その例は無数にあげられる。今回の山崎君殺害の場合も、警察が自から殺しておいて、その犯人を学生だとする危険な謀略であることは、以下にのべる点でも明らかであろう。

現在もなお、官憲は弾圧を続けている。そのため、われわれの反論・立証は、ただちに官憲の側の「証拠」に逆用されたり、証拠湮滅をはかれる危険が多い。これを考慮して多くの点を公表出来ぬことを、あらかじめ御了承願いたい。

たびたびむなく聞える。しかし、あの雄弁な彼らが、その内心に、実は自分の使っている言葉が「一般論」で、自分の魂に本当にはびたりしていないと感じながら、しかもなお教条的なものを可能なかぎり深く勉強しようとしてとめて若者なのだ、とすれば、僕はもっと彼らの声に耳を傾けたい。

学問的にも、社会的にも、まだ不安な無力の状態で、しかも誠実に、それらのもっとも困難な登り口をよじ登ろうとしていた若者が死んだのである。このノートは、あからさまにはないが、鋭く、彼を殺した「時代」を共有するわれわれの心を噛む。(週刊朝日十月二十七日号)

① 山崎君は、弁天橋上から、警察の手によって救急車で「牧田病院」に運ばれ、病院に着いた時には、すでに死亡していたという。「牧田病院」は警察指定病院で、院長は自民党から都議に立候補し落選している人である。急をきいて病院にかけつけた友人、弁護士、医師、社会党代議士(井岡国民運動局長)等は、警官、検事によって阻止され、遺体に対面できなかつ

た。一方的に「検視」を終えた後、慶応病院に遺体を移す時になって、はじめて小長井弁護士ほか若干名が、遺体に対面することが出来た有様である。

② 一方弁天橋の現場では、最初「死んだ、死んだ」という警官の叫びで、事件を知り、皆が闘いを止め注目した。その後しばらくして、警官隊の側から出てきた報道関係者が「ひかれて死んだ」と語り、それが伝播して行った。現場にいた者は後からそれを聞いた者以外、だれも「ひかれた」とは言っていない。すでにここから作話が始まっている。

③ 午後三時、死後まだ三時間半しかたつておらず、遺体は牧田病院に仮におかれており、正式の検視さえ行なわれていない時点で、警察は「れき死」を記者団に発表した。

「山崎君が車の左から右側に向って斜めにかげだし、バンパーにひっかけて倒れた。車の右前輪で腹をひかれ、あおむけになり、車は一度止ったが再び動き出し、胸と首のあたりを右後輪でひいた」と発表した。これは、解剖はもちろん、検視さえ行なわれていない時点で、一方的発表である。

④ 午後八時、警視庁鑑識課は「検視結果」を発表。「右ほおに骨折、胸・腹にも不完全骨折が認められる。右肩から前胸部にかけて長さ二十五センチ幅十センチの断続する表皮のハク脱がある。これはタイヤ痕と推定される」として「死因は胸部挫滅、また胸腹部の内蔵損傷による」とした。

だが、この時一緒に検視を行なった東京都監察医務院(中原義行監察医)の公文書「死体検案書」には、「直接死因、脳挫滅。(推定)胸腹内損傷の疑い」と明記されている。すなわち、警視庁の「検視結果」発表そのものが、実際の検視結果とちがう、すりかえ、デッチ上げだったのである。なんのために死因をすりかえて発表したのか。

が、人がよけられぬほどのスピードで進んで、ひいたというのだ。

交通事故などで、大型のミキサー車などにひかれた例でもはつきりしている通り、体はべしやんにになり、頭なら原形をとどめぬまでにつぶれ、目や鼻、口から脳が飛びだし、体なら内蔵がとびだし、見るに耐えぬ惨状となるものである。またひいたタイヤ跡が、特徴ある形で、ひいた方向につくはずである。だが遺体には、いずれもこの状況は見られない。十トンの車でひかれたのではないことは明白である。

⑤ 最初に遺体が運び込まれた牧田病院では、遺体の状況から「死因は頭がい底骨折によるもので、他に致命傷はなかった」とのべられている。遺族側としてはじめて遺体と対面した小長井弁護士は、病院側から「首から下は何ともない」と聞いており、事実そのとおりであった。頭部についても、右顔面、頭部にひどい打撃をうけているが、「顔はきれいで、生前の山崎君をほうふつとさせる」ものであったことを、直接見て確認しているのである。

頭に致命傷を受けていること、それはひどいものであるが、十トンの車でべしやんにされたものではないこと、しかも頭には「タイヤの跡」はまったく認められていないことは、明確な事実なのである。

④ 御遺族指定の医師団は、やむをえず戻された遺体を「触診」によって検討した。すでにのべたとおりの状況では、医師の良心として十分な判断を下すことは出来ない、という条件のうえで、しかし十トンの車によるれき死とは思えない、との意見を表明している。

⑤ こうした各所見の下で、警察が死因を「頭」から「腹」にすりかえたことの意味は、特別の重みをもってくる。牧田病院の医師、小長井弁護士という動かぬ目撃のうえに、だれが見ても「ひいた」とは見えぬ頭

⑥ 遺体は、解剖のため慶応病院に移された。慶応病院は、下山事件において検察側の「自殺説」を主張して東大病院の「他殺説」と対立するなど、疑惑の多い所である。権さんの場合には、遺族の指定した医師団・弁護士などの立合いが行なわれ、解剖の公正がはかられた。

だが、今回は、警察関係者は二十余名も立合いながら、御遺族が要求した医師団、山崎君の在学学校としての立場からかけつけた京大法医学の権威上田教授をはじめ、友人・弁護士等一切の立合いが拒絶された。九日午後三時すぎから、真夜中すぎまで、九時間余もかかった解剖の間中、立合いが許されたのは父君と兄さんのみであり、気分を悪くされた父君に代って、兄建夫氏ただ一人が、故人のそばにあっていただけであった。

しかも、解剖の間中、れき死を当然の前提とする圧力が加えられ、「警棒の跡がない」ことに利用するための細工に主要な努力が傾けられた。御遺族の意志を尊重するならば、専門知識をもつ医師で、御遺族の指定する人を立合わせるのが当然である。聞かずに葬るためには、これさえ拒否し、最後の証拠の遺体まで、権力の手で一方的に切刻んだのだ。

御遺族の指定された医師団の再解剖の要求も拒絶され、もどされた遺体は、脳・内臓、主要な骨の部分を抜取られた「から」であった。文字通り、権力はすべてを奪ったのである。

二、遺体は語る、虐殺のあと

でたらめな警察の死因断定

警察は、以上のような形で、あらかじめ「学生が殺した」とのデマを流し、世論操作を行なったうえに、それに合わせた「証拠」をつくりあげる工作に狂奔し

の損傷について、警察はそもそも頭部を人々の関心から消してしまおうとしたのである。このため死因を、自分達の手でつくった検視結果さえすりかえ、「頭」から「胸と腹」に変えたのだ。権力の壁にかこまれた解剖の進め方、そこでつくり上げられた所見など、すべて頭部の真因を隠すためにのみ、つくりあげられ、利用されているといえよう。

三、虐殺の現場から

れき死説の舞台装置

警視庁・地検は、十月八日の午後「現場検証」を行ない、さらに、その後も、二度にわたって現場検証を行なっている。そして「現場での目撃者も多い」として、二人の警官の名をあげ、「れき死」が現場で確認されたかのごとく宣伝している。だが現場で山崎君と共に闘った人々は、これこそまったくのペテンであることを示している。

① 山崎君と共に、弁天橋の上で闘った学生は多数いる。この人々は直接第一線で機動隊と闘っていたのであり、逆上し、恐怖している機動隊員よりも、はるかに冷静に、勇敢に行動していた。この学生の中に、山崎君が警官隊にとり囲まれ、めったうちにされている現場を目撃している人々が多数いる。(ただし検挙の危険があるため、氏名はだせない)

一方、山崎君がひかれた現場、車の下から引出され救急車に運びこまれるところ、の目撃者は、あれだけの多数の人間がひしめいていながら、警察がいう警官以外に、一人もいないのである。学生はもちろん、報道陣にもいないのだ。こんな奇妙なことがあるのか。

② また警官隊は、学生の動きをテレビ・カメラをはじめおびただしいカメラによって撮影していた。税金を乱費し、検挙の材料とするために、隠しカメラ、私

ている。はじめに目的と犯人があり、後で「証拠」をこしらえるというところこそ、権力をもつ者のみができる「権力犯罪」の特色である。だが、いかに巧みに彼等が立ち回ろうとも、血で書かれた真実を墨で消すことはできない。殺された山崎君の遺体は、官憲が隠しに隠した隙間をぬって、「れき死説」のデマを暴いている。

④ 官憲は、一方的な解剖を強行した上に、それが「れき死を証明した」と発表した。だがこの発表そのものが、つごうのよい部分ばかりを並べ、つぎ合わせたもので、死因を糺明したものには全くなっていない。解剖の結果明らかになった遺体の損傷は、その時間・方向・加害物の種類等についてくわしく検討され、原因が解明されるのが法医学の前提である。だが発表は、各所の骨折、臓器の破損、表皮の傷などを列挙しただけで、いきなり「れき死」、しかも学生の運転した車でのれき死、と断定している。

この段階で死因とされた「頭と胸と内蔵損傷」が、どの順序で、どんな時間で行ったかの解明はまったくなく、骨折や内蔵損傷をおこした方向の検討もない。まして、それが「車にひかれた」ためとの証明は全然なく、特に重さ十トンの給水車によるもの証明はつけようがない。事実所見はただ「重量物による圧力」としているのみである。明らかに疑惑につつまれた解剖の結果さえ、さらにねじ曲げて、あくまでも「れき死説」に結びつけようとする権力の意図は明白ではないか。

⑤ もし警察発表どおり、学生が奪った給水車に、前後輪で二度まで轢過(ひいて、体の上を通りすぎたこと)されたならば、遺体はどうなるだろうか。あの車は、幅約二米、長さ約七米、重さ九・二五トンの鋼鉄製前輪一つ後輪は二つ重ねという巨大なもので、しかもタンクには水が一杯入っていたと思われるので、実際の重さは十トン以上あることは確実である。それ

服から制服の写真班が、数えきれぬ写真をとっている。写真が、発表されぬのはなぜなのか。あれほどの大宣伝に、最も有利なはずの写真が出ないのは、そもそも写すべき現場がなかったからである。

『週刊朝日』十一月三日号は、はじめて「その瞬間」と称する四枚の写真を発表した。この写真自体、いついかなる方法での撮影かさえ明らかにならぬ。もし写真が本物だとしても、第一これが山崎君であるとの説は、小長井弁護士の反論どおり全くありえないのであり、しかも警察発表のような山崎君のひかれ方(左から右へ走ろうとして倒れた)とは全然が違った倒れ方をしている。ひかれたとされる位置も、警察の発表とは全く異なっている。むしろ、この写真のような事件があったのが事実ならば、それは山崎君ではない、という証拠にこそされるのである。

⑥ 同じく『朝日新聞』九日付朝刊、『週刊朝日』十月二十日号は、警視庁警備課小林茂之警部と同課道具保管部の「目撃談」をのせている。

「小林警部が手で車体をバンパンたたいた。『止れ、止れ!』」「車は前輪で首頭を、後輪で腹部をひいた。血が道路にとび散り、攻撃の機動隊員も思わずたじろいだ。道具保管部が叫んだ。

「救急車だ!」

だが、学生警官入り乱れている中で、このような情景を見聞した者は一人もいないし、逆に警官隊の襲撃が止り、異様な緊張が警官隊の内側からひろがってきたのを、多くの人々が体験しているのである。平の機動隊員でなく、係長とか調査官という「警部」を「目撃者」に仕立てるなど、あまりにも「できすぎた話」といえる。

④ もし警部の発表どおりとすれば、ひかれた橋の

上、ひいた車輪に、おびたらしい血が着いているはずである。だが、その場所はひかれたといわれる直後、多くの学生が通っており、血こんなど全くなかったことが確認されている。車輪にもまったく血はついていない。もっとも官憲は、後で学生が洗い流した、と言っているが、問題の車は学生が支配する橋の側にもつてきてあり、多くの見物人や報道陣が終始見えていたのであるから、血を洗い流しておれば、すぐ話題になるはずである。だがだれ一人、そんなことを口にしたりはしないのだ。しかも、今日の警察力をもってすれば、水で洗ったぐらいでは血の跡はたちまち発見出来ることは、一般の殺人事件で例証済みではないか。

牧田病院にかつぎ込まれた山崎君は「頭から血を流していた」のである。そして解剖結果では「血の出る間もないほどの即死」となっている。この奇怪な変化のある法医学の権威によれば、死後二十分以内であれば、遺体に加工し、死因を偽装することは可能であるという。検視官が十分疑問をもって検視を徹底的に行なえば、これは見破られるとのことだが、山崎君の場合、事態は全く逆に進んだのである。

⑤ 問題の車が、学生の側に後退してくるとき、その周りはすでに突撃した警官隊が進出していた。この時の警官の襲撃は、タテと警棒をふるうものすごいものであった。この襲撃に出て、車の進行方向に出た警官が一、二名転んで倒れ、車にひかれそうになったことは、『週刊朝日』の写真にもあり、また目撃者も多い。だがこの警官たちは、車が止ったすきに起上り、無事逃げだしているのである。この点からも、さきの警官の「目撃者」が、デタラメを云っていることは明らかであるし、山崎君の殺害は、これとは全く別のところで行なわれたと見ることが出来るのではないか。警官がひかれかけて逃げ、それとは別に山崎君がひかれ、というほど、時間も距離も状況もありえないことは、

万人が認めるところである。

四、つくられる「犯人」

恐るべきマスコミ操作の手法

以上のような、疑惑に満ちみちた「れき死説」を、官憲が一方的に流布するにあたって、新聞・ラジオが全面的な協力を果たしてきたことが、一層この権力犯罪を助けてきたといえる。日本のジャーナリズムが、特に安保闘争以来、きびしい政府の思想統制に屈服し、社会正義とか中立とか真実の追求とかの看板を投げだし、権力の宣伝の具と化したことが、この間の報道ぶりにはつきり示されている。心ある新聞人はこの事態を憂え、取材をしている各社の記者自身さえ、自分の社の記事を信じていない有様である。だが論調はいっこう改まらず、各紙は「ひき殺し犯人」を追及するという官憲の謀略に、依然として協力しつづけているのだ。

① 八日が日曜日で、夕刊が休みのため、事件は一斉に九日朝刊に報道された。だがその記事は、どれも全学連に対する猛烈な悪宣伝で塗りつぶされていた。政治的評価はともかくとしても、山崎君の死の前後の報道は各社まったくバラバラであった。だが特徴的なことは、どの新聞も、記者が自分の目で見、足で取材したニュースでなく、特に現場で学生や見物人から、目撃談を聞きだすことすらやっていないこと（あるいはそうした記事は落とされたのか）である。

各紙は、もっぱら「警視庁発表によれば……」と、その報道をすべて警察当局の発表にもとづき、それを無条件の前提にしているのである。まったく「新聞が警視庁の宣伝機関紙になった」という状況であった。この態度が一貫したマスコミの方向なのである。

② 『読売』だけは、社会面に「渡辺治雄記者」の署

名入りで現場の状況を伝えている。だがこの記事はおよそ現場の実態とかけはなれた作文である。しかるに「学生の一人が橋ぎわに倒れた。頭から血を出して……。橋ぎわはひかれた学生の血でまっ赤にそまつた。これは殺人現場そのままではないか」などと、まったく見てきたようなウソを書いているではないか。渡辺記者は、デマ記事によって権力犯罪に加担した社会的責任をとるべきである。

③ 日本共産党機関紙『赤旗』は、死因について二つの説を並べて書いていた九日号の記事を全文取消し、十一日号で、わざわざ「解剖結果、れき死と断定」なる記事にかえ、日ごろ闘っているはずの警視庁談話までをのせた。「これでトロツキストがかれらの挑発行動を美化する策動は、根拠を失った」とするにいたっては、十一日付『毎日新聞』の「余録」欄と同じく、官憲の宣伝を最も強く支援するものである。松川・菅生などの権力犯罪と闘い、今も白鳥事件の村上被告の釈放のために闘っている共産党が、「トロツキスト」に対してならば同じ権力の犯罪に手を貸すとは許しがたい裏切りでなくてはならないであろうか。

④ 九日付夕刊各紙は、「車を運転する学生」等の見出しで、警視庁が発表した一枚の写真ののせた。ヘルメットをかぶり、車から身をのりだしている学生の写真は、いかにも「これが犯人だ」といわんばかりの、宣伝効果をもって報道された。だがこの写真は、学生が警備車を運転しているにすぎず、しかもこの写真の主が「ひいた」のではないことも、承知のうえで発表されたのである。学生が車を奪い、運転したのは事実であり、記事をくわしく読めば、ただそれだけのことで、山崎君の死とは何の関係もないことは明らかである。だが紙面は、意識的に山崎君をひいた「犯人」のイメージをうえつけるようにつくられているのだ。

(十ページ下段へ)

山崎博昭君の死について

政治的な「れき殺説」

弁護士 小長 井 良 浩

以下の文章は、『社会新報』十月十八日号にけいさいされた一文である。最初に山崎博昭君が収容された牧田病院で遺体を確認された小長井良浩弁護士が、官憲のフレーム・アップをあげくために客観的な事実にもとづいて執筆されたものである。

(一)

この事件を私が最初に知ったのは、一〇月八日午後三時一五分頃、自宅で裁判記録を読んでいるときであった。私は、国鉄労組、全電通労組、政労協、全糖労協などの顧問をつとめる総評弁護団所属弁護士であり、三里塚空港設置反対運動の弁護団長でもあるが、この日曜、たまった仕事を処理すべく、明治不動産事件の無罪論の構想を練って、昼食もぬきにして没頭していた。そこへ電話で一学生がデモで死んだので、ともかく現場にすぐ来て欲しいという連絡を受けた。私は、多忙などのため、学生事件はこれまで引受けな

院に着いたのは、午後四時四〇分、すでに遭難後五時間余りを経て、夕暮になっていた。病院前に警備する警察官をかきわけて院長に面会を申し入れ、副院長に案内され、遺体が安置されている霊安室で院長らに見、治療などについて尋ねた。

そのときの院長らの話では、死因は脳内出血、ほかにはさしたる外形的所見はないとのことであった。遺体の搬送を控え緊張した雰囲気の中ではそぐわないことではあったが、そこは弁護士としての勤がピンと来たので、思い切つて遺体を見せて欲しいと申出て、棺のふたをあげた。そして問題の頭部について、居合せた社会党国会議員、弁護士、友人にも見ておいていただいた。遺体の右側顔部および頭部に挫創がある、右額になにかに突かれたような跡があることが顕著であったが、顔面、頭部が挫滅したわけではなく、生前の山崎君の姿そのまま思い浮べることができた。

このとき、私は学生がデモで死んだという以外になんの予備知識もなかったが、いざいざにしても死因の究明がなされなくてはならず、それには解剖が重要であり警察・検察側だけが立会うようでは真相の発見が妨げられ、公正に疑念をもたれると考えられた。遺体解剖の搬送に来ていた刑事らに検事への面会を取りつづき強く申し入れたが、かたくなに拒否された。

こうして、慶応病院の地下室に遺体が格納されたのを見届けて、次の対策のため、タクシーで事務所に行く途中、NHKラジオの午後七時のニュースが、京大生山崎君を学生の運転した自動車ひき殺したという警視庁発表を流していたが私も、このニュースにはショックを受けた。これは学生諸君に対する絶好の攻撃材料に使われよう、学生諸君も拙いことをしたものだと思案した。しかし、この報道には、どうもひっかかるところがある。事務所で行っている考えをみると、脳内出血が致命傷という自分が聞いた病院の話、遺体が挫滅していないという現に自分で見た事実が、学生が運転台を奪った巨大な装甲車がひき殺したという警視庁発表とどうしても結びつかないのであった。あれだけ

の装甲車の重みをもってひかれたならば、人間の頭は見るも無惨におし潰されてしまうのではないか。従来取扱った交通事故事件の例では、思わず目をそむけるような被害であった。

私は、警察の言っていることは違う、と思うようになっていた。このままではなにか警察がいい子になって、学生諸君がいわれなく悪者にされかねない。警視庁発表が圧倒的な洪水のように全国にあふれるなかで誰かがこれに疑問を出さなくてはならない。それをやるのは、この場合、私しかないと思った。私は、最初事故発生時の電話を受けたとき指示しておいた目撃者捜しを強化することを督促し、その結果、当夜のうちに、私の疑問を確かめることができたのである。

(一)

翌九日の朝刊各紙には、山崎君の死因についての記事が出た。被害者について学生説(警視庁)、警官説(私)、犯行について内蔵(腹・胸・首)説(警視庁)、殴殺説(私)、致命傷について内蔵(腹・胸・首)説(警視庁)、頭部説(私の見た限りで)といったように、警視庁と私とで事件の見方が真つ向から対立した。

しかし、警察当局の問題対処の方策には初めから、許しがたい非違が重ねられていくことを指摘しなくてはならない。

第一に、「警視庁は八日午後九時、同鑑識課と東京都監察医務院の検視結果」として「死因は内蔵損傷」と「発表」し(例えば一〇月九日付朝日新聞夕刊)頭部傷害についてはまったくほおかむりした。しかし東京都監察医務院の一〇月八日付「死体検案書」には「死亡の原因」として、「脳挫滅、胸腹腔内(推定)損傷の疑い」と明記されているのであって、死因の主位は頭部傷害である脳挫滅となっている。警視庁が最も

大切な頭部傷害を隠し胸腹部の傷害とすりかえたことは動かすことができない。警視庁の死因の発表が学生によるれき殺との印象を与えるために行なわれた工作であることは、疑いを容れない。

第二に、捜査当局は遺族の報告によれば、司法解剖は二〇名近い係官を立会わせ、執刀する齊藤慶大教授のそばで「これはれき殺に間違いない」とささやき、圧力をかけるとともに、遺族の推薦する医師の立会いはついに拒否した。そもそも捜査段階における鑑定処分には宣誓も対立当事者の反対尋問もないのに、かけがえのない遺体を処理してしまうことには問題がある。まして本件では、死因が争われている事案である。しかも捜査当局が頭部傷害について検視結果を隠し、ねじまげて虚偽の発表をしているときである。安保闘争でたおれた榊美智子さんのときには、遺族の意思を尊重して立会い医師を認めた先例もある。しかし、山崎博昭君については、一方的な態度に終始し、捜査当局によって独断的な発表が敢行され、学生によるれき殺という世論操作に用いられたのである。

第三に、捜査当局は、山崎君の死亡を学生による殺人事件として捜査すると発表した(例えば一〇月九日付朝日夕刊)。あまりの政治的捜査に啞然とする。法律家の常識では、たとえ警察発表を仮定したとしても過失致死事件であって、殺人事件は立つはずがない。さすがに国会では、警視庁次長は、殺人事件にはならないと答弁した。しかし、このような発表が行なわれると、一般人は、なにか学生が仲間同士殺人をしたような誤解をもつであろう。そこが治安当局の狙いに違いない。本件において捜査権力は、手段を選ばない政治的な仕方、一切デモを叩きつぶすことを策しているものとみるべきである。



中央追悼博昭君山崎抗議抗殺

一万人が参列した山崎君国民葬

十月十七日夜、「虐殺抗議・山崎博昭君追悼中央葬」が日比谷野外音楽堂で行われた。雨と官憲の厳戒体制をついて一万人が参列、同志の霊に復讐を誓った。

〈よびかけ人、よびかけ団体〉

| | |
|--------|------------|
| 榊 光子 | 日高 六郎 |
| 小長井良浩 | 堀田 善衛 |
| 鶴見 俊輔 | 村上 一郎 |
| 羽仁 五郎 | 雪山 慶正 |
| 秋山 勝行 | 吉川 勇一 |
| 高橋 孝吉 | 革命的共産主義者同盟 |
| 成島 忠夫 | 共産主義者同盟 |
| 樋口圭之助 | 共産主義労働者党 |
| (以上代表) | 社会主義学生同盟 |
| 浅田 光輝 | 社会主義労働者同盟 |
| いいたも | 社青同東京地本 |
| 井汲 卓一 | 社青同学生班協議会 |
| 井上 清 | 社青同学協班解放派 |
| 井上 光晴 | 自治会共闘 |
| 岩田 宏 | 砂川基地拡張反対同盟 |
| 梅本 克己 | 全学連 |
| 大井 正 | 電通労研 |
| 大沢真一郎 | 統一共産同盟 |
| 岡本 潤 | 統一社会主義同盟 |
| 観世 栄夫 | 東京地区反戦連絡会議 |
| 榊 俊雄 | 都学連 |
| 久野 喜夫 | 長崎造船社研 |
| 黒田 喜夫 | 反帝学評 |
| 齊藤 一郎 | ベトナム反戦共闘 |
| しまねきよし | マルクス主義学生同盟 |
| 杉本 昌純 | マル青労同 |
| 壇谷 雄高 | 六・一五救援会 |
| 林 光 | (五十音順) |

(二)

本件の捜査は、山崎君の死につけこみ、商業報道機関を総動員して佐藤首相のベトナム行きという政治問題から国民の目をそらさせた。

そして、学生の集団示威運動自体を不許可にした警察当局の違憲処分の問題をかまくまおうというのである。そればかりか、山崎君の虐殺を学生諸君になさるうとしている疑いが濃い。

七〇年安保問題をひかえ支配権力は、政治街頭デモをこの機会に根絶やしにすることを狙っており、権力側と運動側とで死活の攻防がくりひろげられているとみなくてはならない。

こうして山崎君の死因問題は特殊な政治問題として当面の焦点となっている。

この政治的事件についてなにかとつもない陰謀によって虚偽が固められているのではないか、という疑惑をとことんまで追及したい。

革命的共産主義者同盟の機関紙誌

週前 進

購読料 一部二〇週四〇〇円 (送料共)

季 共産主義者

定価 一部 二〇〇円 (送料五〇円)

16号発売中/同盟第三回大会政治報告けいさい

追悼のごとは

よびかけ人代表
同志社大学教授

鶴見 俊輔

呼びかけ人の一人として御挨拶致します。初めに山崎君の為に一分間の黙禱をささげたいと思います。この集会は羽田で亡くなった山崎君をいたみ、山崎君の死に抗議し、反戦の闘いを発展をさせることを願う、あらゆる人と団体によって開かれたものです。いそいだものから何人かの個人といくつかの団体が呼びかけましたが、ここに集まった方全体の集会にしていきたいと思ひます。おさしつかえなければお帰りの前に名前を書いて戴きたいと思ひます。

首相が南ベトナムに旅立ったということは、日本がベトナム戦争にさらに深くふみ込んだということを意味してしまふ。その首相の旅の意味を学生諸君はするどくとりえて、これを阻止するために羽田に集りました。この学生達は暴力団と呼ぶことは私にはできません。山崎博昭君の死はこの状況において起りました。武装された機動隊と、これに

素手でたち向つた学生達との衝突の中で引き起こされた山崎君の死について、機動隊の側が責任を持つことはあきらかです。私は学生が持つてゐる程度のごん棒とか石とかは「素手」と理解していません。それは億というカネで武装されている警官隊とまったくちがう質の物だと思ひます。新聞やテレビが、それらにでている人達がその状況を理解しないことは残念です。

安保闘争の時の樺美智子さん、羽田事件の山崎博昭君が国家に抗議して、素手でぶつかつていって倒れる。そのことをいたましく感じます。こういうことを繰返してはいけません。学生のみならず、お怪我をしてほしくありません。しかし同時に、この人達に加える批判に同調することはできません。この人達を死に追いやつた国家権力に対しては、何年たつても告発の手をゆるめないようにしたいと思ひます。

山崎君の死は今、私達の前にあります。この解釈は自由です。しかしどのような立場を取ろうとも、この日本の青年が、ベトナム戦争に抗議する行動の中で亡くなった、そういう事実はおおいにかくすことはできません。ベトナムは私達日本にとって遠い所のように感じられませんが、この環境の中に今、私達の仲間の一

人がベトナム戦争反対の闘争の中で殺されたという、もう一つのうたがいえない事実がなげこまれました。私達の毎日の穏やかな環境の中に、この事実を作りだす座りごちの悪い、妙な感じが、私達の中に生き続けることを願ひます。

よびかけ人代表
故樺美智子母堂

樺 光子

よびかけ人として、いいようのない悲しみの中にも、こんなに多勢の人が集つたことをうれしいと思ひます。日本にはまだこういう力があることを改めて思ひ知らされました。

七年前の安保闘争で美智子が虐殺され、今また山崎博昭さんが殺されました。しかし日本にはこのような死をのりこえて力強く前進する力がこんなにもあります。日本の社会を改革して新しい未来をひらく日も近いということを確認しました。

大きな未来をもちながらなくなつた山崎さんにむかつて、どうか同志の胸の中に、遺族の方の胸の中に、労働者の胸の中に、私たちの母親の胸の中に安らかに眠つて下さい、といいたいと思ひます。

大手前高校時代の同級生

島本 恵子

山崎君の死を私はまだ信じられない氣持です。

羽田へ行く二日ほど前、私が彼に「山崎がクラスのことを一生懸命やってくれたので本当に助かる」と大西君が話していた」と言つた時、彼は恥ずかしそうに否定しながら笑つていました。羽田へ向うバスの中でもふざけたり冗談いったりしていたというのに。

彼は私達と共に、今春大手前高校を卒業し、京大文学部に入学しました。高校時代の彼は私の目には数学の素晴らしい秀才としてしか映つていませんでした。ところが、春の自治会祭、秋の文化祭、と学校側との対立、衝突が生じる中で、彼は動かないクラス代表に代つて、俺がやつてやる、と議長をかつて、グラスをリードしていきました。それから秋のベトナム反戦闘争、彼は日韓のときつくなつた反戦高協のメンバーとして、私達大手前高校からの五十人ほどの隊列の中にありました。

世の多くの人々が小さな正義感、少しの真理への憧憬をもちながらも、結局は

弔 辞

日本社会党中央執行委員会
青少年局長

伊藤 英治

私は日本社会党中央執行委員会を代表して佐藤内閣のベトナム訪問に反対する闘いのなかで、尊い一命を奪われた山崎博昭君の霊に心から哀悼の意を表します。

いま、佐藤自民党内閣はアメリカ帝国主義者のベトナム侵略戦争に加担する狙いをもつてアジアの参戦国を歴訪しています。

このような佐藤政府の政策は平和と民主主義を要望している多くの日本国民の考えに背く行為であり、日本国憲法を蹂躪するものであり、我が国をかつての帝国主義の国家に引きもどそうとするものであります。

山崎君、君が佐藤政府のこのような行為を絶対に許すことが出来ないという強い決意をもつて十・八羽田闘争に参加したことを私たちは知っています。また君は、青年のたぎる熱情をもつて全生命をかけてこの闘いに参加する決意

現実と握手している中で、彼の真面目さ、誠実さはそれを許しはしなかつた。私は彼の死の後で、羽田へ行く前彼がいろいろな疑問を感じていたということを知りました。ともすれば何か壁にぶつかるともうすぐそこから回避しがちだった私に、そのことは大きな衝撃でした。彼はその真剣さでもつて、行動から逃れることなく、その中で壁に向つていったのだと思ひます。

連日繰り返されるマスコミの宣伝、悪らつた「運動家のイメージ」のデッチ上げ。私はどうしようもない憤りを感じます。私は彼の誠実さ、真面目さを知っています。だからこそ彼は羽田で闘つたんです。

彼はもういません。可能性は断ち切られてしまいました。けれど、死んだものが帰って来ない以上生き残つたものは如何すればいい？ だと思ひます。彼の反戦の遺志を受けつぐものがいなければ、彼は本当に死んでしまいました。

警棒が襲つてきたときの彼のくやしさを、そして彼の死に対する私の悲しみを、涙を、私は組織していかねばと思ひます。もっと反戦の運動が高まっていかなら、彼は死ななくてすんだことではない。

私達はコトバじゃなく、真に彼の死を越え、中断された彼の平和への渴望を受けついでいかねばならない。彼を虐殺し私達を苦しめている重苦しい権力のものない、そして、警官もコン棒をもたなく

てすむ、本当の自由な世界へ向う努力をしていかねばならないと思ひます。山崎君、あなたは死んでしまつたけれど、あなたの心はみんなの中に生き続けます。安らかに眠つて下さい。

十・八不当逮捕の獄から
元全学連委員長

北小路 敏

同志山崎博昭の虐殺に満身の怒りをこめて抗議します。

私は今、逮捕され警視庁に留置され、この国民葬に参列できないことは非常に残念です。私は今、完全黙秘で闘っています。不当な官憲の弾圧に完全黙秘で闘うことが外での闘いと連帯するものであることを確信します。

十月二十一日の反戦スト、十一月の佐藤訪米阻止を全力をもつて闘うことが唯一の同志山崎の霊にむくいることであることをここにあらたに誓ひ、明日からの闘いに全力をつくしたいと思います。

竹内隆善

私はいま反戦青年委員会を代表して申意を述べるにあたり、なにもにもかえがたい生命が権力の手によって奪われたことに對して限りない憤りをおぼえるとともに、残されたものの責任の大きさを深く感じるものであります。

佐藤首相の南ベトナム訪問は日本をぬきさしならない侵略加担者に追いこむものであります。

私たちが十月八日羽田で激しい抗議をおこなったのは、この危険な企みを実現させてはならないと考えたからにほかなりません。

山崎君、私はあなたの死が私たちの侵略者に対する憤りと運動の死につながるのではなく、あなたの貴い犠牲が侵略に反対するすべての人たちの固いきずとなることを確信します。

反戦青年委員会はいま決意をあらたにしてさらにいっそうの力強いベトナム侵略反対の闘いをおしひろげようとしています。

山崎君、私は日本の青年学生があなたの無言のげましをうけて前進するだろうことを確信するとともに、反戦青年委

員会がその先頭にたつことを誓うものであります。

日本山妙法寺

藤井日達

南無妙法蓮華經

日本国の首相佐藤榮作が最近東南アジア諸国特に南ベトナム訪問旅行は従来日本の中立政策を変更してアメリカのベトナム侵略戦争に積極的協力加担することになるといふ見解は已にアメリカの新聞でも報導されております。

されば日本国の民衆が佐藤榮作の無責任をどうして無関心で見過すことが出来ましょう。今日何の名分なく且つ野蛮にして残酷極まるベトナム戦争反対の市民運動はその本国のアメリカ全国をゆるがしております。

日本民衆が安全保障条約の下に束縛されたる日本国の前途に、いかに不安と焦燥が深刻なものであるかは、敏感なる青年学徒山崎博昭君の横死に由て表現せられました。民衆の不安焦燥を抑圧せんがために、国家権力の権化した機動隊をして暴力を採用せしめました。併し機動隊が暴力を振つても民衆の不安と焦燥とは一向に解消されませぬ。

山崎博昭君は日本国の平和を求め、ベ

トナム戦争の終結を求め、アジアの安全を求めて、遂に十月八日佐藤榮作が侵略戦争の火元たるサイゴンに飛立った羽田空港に無惨の死体となりました。

佐藤榮作のサイゴン行に引続てワシントン行がもしも強行され暴走されるならば国民の不安と焦燥とはやがて取返しのつかぬ日本国の悲劇となって演出されましょう。

山崎博昭君が生きて榮作のサイゴン行を止め得なかつたけれども、君の死が日本国の前途の悲劇を未然に解消する灯明となるように、国民は協力を誓いましょう。(代読)

日本婦人會議議長

高田なほ子

山崎博昭君のみたまに謹んで哀悼のことばを捧げます。

十月八日、羽田空港の混乱の中であな

たは痛ましくも僅か十八才の短い生涯を閉じてしまいました。

山崎さん、あなたはこうして死んでしまったのですか。

御両親にとつて御兄弟にとつてかけがえのない大きな希望の星であったのに。あなたの無惨な遺体は、いつでもあなたを守っているやさしい誰一人にもつき

添われることなく、数十人の乱闘服に身を固めてあなたとあなたの友人を弾圧した手によって、たった一人で運び去られました。

何も云うことの出来なくなつたあなたを守らねばならない代弁者さえ政府側の冷酷な手がさえ切つたのです。

そして一方的にあなたの死因が発表され、然もこれを根拠として佐藤内閣は自らの責任を学生の責任に転嫁し、弾圧規制の対策を強化しようとしています。

あなたはどのようにして何者の手によって殺されてしまったのですか？

何卒云つて下さい！
誰があなたを無惨に殺してしまったかを！

そうです。七年前の十月十二日、安保闘争の歴史的なより上りの中で社会党の浅沼委員長は凶刃にたおれました。また若く美しい権美智子さんの命が奪われました。

その黒い魔手があれからいよいよ凶暴になり、沖繩の本土復帰を阻み、平和を願う人々を敵視し、日本の軍事化のために一切をあげて狂奔しているのです。アジアの反共独裁国家の盟主としての道をひた走っているのです。この道こそ安保の本質であり、あなたを奪つた元凶であることを決して見逃してはおりません。

私達日本婦人會議は、子供たちの健全な生長を願ひ、全国の母親達が安定した平和な生活を打ちたてる為、一切の戦争政策をはねのけ、再び夫や息子たち

を殺さないために、平和憲法の旗のもとに結集した母親の集団です。だからこそ今日ベトナム侵略戦争が異常な段階に突入していることを憂えるのです。世界の与論と共にアメリカは即時無条件に北爆を停止すべきことを要求するのです。

このような時に佐藤首相が南ベトナムを訪問し、参戦国の仲間入りする行動をすすめることは恐しい戦争の体験をふんだ母親たちにとっては許すことができないのです。

しかし私達母親の行動は、強固な反戦意識に支えられながらも、それを十分に組織化することができない段階にあることを何卒許していただきたいのです。日本中の子供を思う母親達が火の玉となつて、国民に背をむけた今回の佐藤首相のベトナム行きを阻み得る大きな力になることができたら、あなた一人を殺さずにするだけでありましょう。

あなたが死をもつて求めた平和への道は、私達母親も求めてきた道なのです。険しい道のみならず大きな力をつらねてこれからまた歩みつづける決意です。力足りなかつた私達母親をどうぞ許して下さい。

新たななる平和への立ち上りを御誓いし、あなたのみたまの永遠に安からんことをお祈りし、弔辞といたします。

婦人民主クラブ

佐藤首相の南ベトナム訪問を、ベトナム侵略戦争への加担をいっそう深める行為として、これに抗議した十月八日の学生たちの行動で、山崎博昭さんの若く尊い命が無惨に奪われてしまったことを、まことにまことに口惜しくいたましく、日本の母親たちの思いをこめてここにここに哀悼の意をささげます。

佐藤首相の南ベトナム訪問は、平和の名において許せない行為です。当然平和のために国民的抗議が盛り上がるべきであったのです。学生たちの羽田の行動に批判すべき点はあるにしろ、私たちは多くの国民の要望を無視して南ベトナム訪問を強行した佐藤首相の政策が、優れた一人の日本の息子、山崎博昭さんを殺した、ということから目をそらしてはならないと思います。

平和のために活動してきた母親たちの団体である婦人民主クラブは、山崎さんのお母さまのお気持ちも含めて、博昭さんの霊前で、こうした政府のあり方に怒りをこめて抗議を表明いたします。また、学生を暴徒扱いで、現場での学生の行動のみに批判を集中したマスコミの態度に

も強く抗議いたします。それは事ごらの本質を国民の目からまかつたくそらしてしまつたからです。

それにしても、多くの国民が首相のベトナム訪問に抗議する意志をもつていますのに、その意志表示の組織行動は弱く、学生たちを孤立させてしまったことがこのような大きな犠牲を生んでしまつたのではないのでしょうか。いま博昭さんの死は、そうした大人たちにきびしい啓示を与えていると思います。

博昭さん、あなたの死をムダにさせないこと、あなたの死を正しく生かすこと、私たち母親にとつても、そうすることがいまあなたに捧げる唯一のたむけである深く心に期しております。

永久にあなたの生命が私たち母親の中に、ひいては父親にも、息子や娘たちにも生きつづけることをどうか見守つて下さい。

砂川基地拡張

反対同盟

私達砂川町基地拡張反対同盟一同は、十月八日羽田空港に於て、佐藤首相のベトナム訪問阻止の際虐殺された故山崎博昭君の御霊前に、謹んで哀悼の詞を送らせて戴きます。君には今年三回に亘る

立川基地拡張阻止の闘いに遠路御参加を戴き、我々の闘いの戦列の中核的行動を示され、平和と民主主義の正しい建設の為に生前御尽力下さいましたことは、砂川の人々の脳裡に強く刻みこまれて居りました。君の虐殺された遺影が報道された時に砂川の人々の口から同じ様に話された言葉は、砂川に来て戴いた学生さんだと呼ぶ悲しみの言葉でした。

今度大東亜戦争の悲惨な敗戦と君の様な多数若者の命を失ひ、その代償として全国国民の信頼と支持を得て平和憲法を制定した立憲精神は、その前文に示す如く平和を求め戦争の否定である。こうした立憲精神を首相自ら蹂躪して、侵略戦争の交戦国と友好を求めることは、我が国の憲法を犯すものとして、さらに大東亜戦争のみじめな犠牲者を無視し全国国民を欺く以外の何ものでもなく、これを阻止する行為は全国国民的なものでなければならぬ。しかしながらこうした当然な行動を狂つた国家権力は、君を虐殺し真実を隠蔽した暴挙の限りを尽している。

我々はこの陰謀を暴露し、君の行為を正しく立証することが、君を二十年間手塩にかけていづくしみ育んで戴いた両親への、我々君と志を共に平和を願う者のしなればならない最大のつぐないであり、君の御冥福を祈る一つの途である。君の正しい行動を裏付けるものは、総ての平和を求める人々が思想信条を乗り越え一致団結して権力の陰謀である君の災害の直接の原因の糺明を行なうこと

が、首相ベトナム訪問の欺瞞を暴露することと結びつくであろう。

君の今度の災害と同じことが砂川に於ても五・二八で岡山大学の宮崎君が受けられている。宮崎君は幸い中山先生の御協力と、御両親の海よりも深く山よりも高い愛情によって一命を得る幸を得ましたが、君にはその事かならず幽明境を異にしたことは何としても残念でなりません。こうした警官の暴力は前例のある行為として残されています。私達はより多くの人々の協力によって必ず狂った権力の実態を糾明して君の正しい行動を一つ一つ立証し、断乎権力に抗議し、さらに新しく闘いを発展させることをお誓いいたします。このお誓いの実践は砂川の私達が最後まで平和運動の土台となって永久に闘い貫くことだと信じます。

三里塚芝山連合反対同盟委員長

戸村 一作

われらの同志山崎兄弟の死を心から悼みます。私は本日千葉県警に抗議して、ここにかけてきました。本日未明県警は昨日の公団のくい打ちに抗議して闘った二人の仲間を、その寝込みを襲って逮捕

藤訪米阻止をはじめとする反戦平和のたたかいを全国的に展開し、職場、学園に不拔の革命のとりでをきずきあげること

でなければならぬ。十月八日闘争の歴史的・積極的な意義は、これをふまえずには反戦平和闘争の大衆的指導が今後不可能なほど大きなものである。

同時にこの日羽田空港に、組織された労働者階級の巨大な統一的力量が動員されてきたならば、権力の弾圧は弱められ、山崎君を死なせずにはなせえただろう。このことについては左翼勢力は全体として責任を痛感しなくてはならぬ。

われわれは痛恨をもって山崎君をいたみつつ、反戦平和のたたかいを階級全体のものとするため、全力をつくすことを山崎君の霊前に誓うものである。

(以上までが式場で読あげられた手辞です)

共産主義者同盟

日本の階級闘争の中に輝ける十・八羽田闘争の中で雄々しく闘い、倒れた山崎博昭同志、われわれ共産主義者同盟中央委員会、あなたの死に對し心から哀悼の意を表します。

世界階級闘争の新たな流動と、アメリカ

しました。国家権力は二千の警官を動員して測量を強行しましたがその恥知らずの機動隊がここにもいることにいいようのない憤りを覚えます。

佐藤は羽田空港に山崎君を殺して東南アジア、ベトナムに飛びたちました。ベトナム侵略戦争はついに日本の若い命を奪いました。

私たちの同盟は、たんに農地を死守するだけの同盟ではありません。命を賭けてベトナム侵略戦争に反対して闘った山崎兄弟と空港設置に反対している。私達農民の闘いは一つです。世界の平和のためにこの死をムダにはなりません。

アジア・アフリカ人民連帯日本委員会
日本中国友好協会(正統)本部
日本ジャーナリスト同盟
日中友好宗教者懇話会
中国帰還者連絡会正統本部

右代表

坂本 徳松

私はアジア・アフリカ人民連帯日本委員会、日中友好(正統)本部、日本ジャーナリスト同盟、日中友好宗教者懇話会、中国帰還者連絡会正統本部の五団体

を代表して、つしんで弔辞を申し上げます。

カ帝国主義のベトナム侵略、日本帝国主義の反革命的介入が日増しに強まる中で、君とともに闘った羽田闘争は不拔の歴史的意義をもっています。

われわれは君の死に深い悲しみを禁じえません。しかし、われわれは君がまさに最先端で闘いぬこうとしたその事業一プロレタリア日本革命とプロレタリア世

弔 電

羽田の路上に流されたおびただしい血潮と失われたあなたの若い生命は、日本帝国主義者の暴虐さを白日のもとに暴露するとともに世界中のベトナム反戦の闘いを大きく励ました。しかし同時に、それはあなたがたに孤立した闘いをした日本の全左翼の責任を鋭くせまっています。この責任に答えることこそ生命を賭けたあなたの闘いにむくいるただひとつの道なのです。

私達はその責任を必ずまっとうすることをちかいます。山崎君、安らかに眠って下さい。長崎造船社会主義研究会

反戦平和の戦士山崎君の死を心から悼む。彼の死にむくいる事は全国学友とともに悲しみといかりをわかち、敵の悪質なデマゴギーと弾圧に抗してベトナム反戦、侵略と虐殺の佐藤内閣打倒のために学生戦線の大衆的統一行動で闘い続けることだ。ともに悲しみといかりとも

トナム訪問を阻止し、アメリカ帝国主義のベトナム侵略戦争に反対する羽田での闘争で、壮烈な犠牲となった山崎博昭君の英雄的な死に對して、心からの哀悼をささげ、御遺族の皆様につしんでお悔みを申しあげます。

山崎君は、アメリカ帝国主義と佐藤政府が共謀しておし進めている侵略・戦争政策に對し、広範な日本人民の闘争の先頭に立って、恐れを知らずにたたかっただけの英雄です。かつて安保闘争のとき、同じ犠牲に斃れた権美智子さんとあわせて、われわれは二人の兄妹の若い生命を敵に奪われました。

ベトナム人民が民族的英雄グエン・パン・チョイの犠牲的な死を悼み、その死をのりこえて、グエン・パン・チョイの道を進んでいるように、われわれは樺さんや山崎君の死を悼み、その死をのりこえて進まなければなりません。

日本の親米反動勢力を代表する佐藤政府が武装警官を動員して男女の愛国的学生青年、労働者、市民を気狂いのように弾圧したことによって、佐藤政府の売国的フアシストの本質は一層明らかになつていきました。

われわれは「人民の利益のために死ぬのは泰山より重し」という毛沢東主席の言葉を示す通り、正義のためには犠牲を恐れず、困難にたじろがず、アメリカ帝国主義に反対し、ソ連現代修正主義に反対し、佐藤政府に反対し、日共修正主義に反対する旗を高くかかげ、アメリカ帝

界革命をかちとるための決意を、君のなきがらへの追悼いたします。

山崎同志よ、安らかに眠って下さい

社会主義学生同盟全国委員会

(略)

埼玉羽生・白石卯一郎

(略)

に闘わん。全国学生自治会共闘

われわれの先輩山崎君の死を悼み官憲の暴虐に断固抗議する。われわれ高校生も攻撃にひるむことなく大衆的高校生運動の発展のために闘い抜くことをちかう。反戦高協

山崎君の死に哀悼を表し、虐殺に抗議し、ベトナム反戦とともに闘い抜こう。

杉並区議・長谷川英憲 杉並社会科学研究会

山崎とゲバラが死んだいたみをいつまでもいつまでも忘れない。豊田市政研 渡久地政司(豊田市議)

山崎博昭君の死、悲しみといかりに胸いたむ。犬死にならぬこと、ご冥福をいのる。中村チエ(杉並の七十才の婦人)

国主義のベトナム侵略を打ち破り、日本と中国その他アジア諸国人民との友好・連帯をうち固め、沖繩を解放し、祖国の完全な独立をかちとるために、最後までたたかひぬかぬばなりません。

これこそが山崎君の死を悼み、山崎君の死を生かすただ一つの道であります。

山崎博昭君。君の死を悼み、君の死をのりこえて、祖国の完全な独立と解放のためにたたかひぬくことを、君の霊前に固く誓って弔辞と致します。

共産主義労働者党

統一社会主義同盟

統一社会主義同盟

統一共産同盟

十月八日羽田空港での佐藤訪ベトナム阻止闘争にさいし権力は兇暴な弾圧をくわえ、山崎博昭君の若い生命を奪いさつた。

われわれは山崎君の死を心からいたむとともに、山崎君を殺した佐藤内閣に對する憤激を強く表明する。山崎君はベトナム侵略戦争とそれに加担しつつアジアの盟主たろうと野望する日本帝国主義に抵抗するすべての人びとの共同の犠牲である。山崎君の尊い死に報いる道は、佐

山崎君の死を心からいたみます。追悼のための行動は、この死を利用して一切のたくらみをこえる革命的行動の中にあることを信じます。

梅本克己(哲学者)

国家権力の前にたおれた君の死は

われわれのなかにむらさ

君の死をだいて

われわれもねむらないだろう

日本帝国主義を許すな

黒田喜夫(詩人)

山崎博昭君の逝去を悼み、謹しみて慶弔の意を表す。大谷栄潤

以下電文略。名古屋大学追悼集会。反戦高協長野県委員会。三多摩反戦。江戸川反戦。墨田反戦。葛飾反戦。杉並反戦中央反戦。千代田反戦。

北京・西園寺公一。日中友好協会(正統)訪中若い婦人代表団。在北京日本人反帝反修連絡会議。日中友好協会(正統)山口県本部。北海道本部。熊本県本部。高知県本部。兵庫県本部。山梨県本部。愛媛県本部。福岡県本部。福岡支部。水戸支部長。社青同奈良地本。共産党行橋革命派。

御遺族宅によせられた弔電
衆議院議員穂積七郎、同西風勲、同井岡大治。参議院議員樺繁夫。大手前高同窓生奥西房子。京都府大古美研一同。京大教養学部長、同学生部長、同文学部。生駒。石田つゆ。金田まさえ。佐古田。

全日本・全世界の闘う学生・労働者人民へ

全学連委員長 秋山勝行

全日本・全世界の闘う学生、労働者人民へ心からなる熱烈な連帯の挨拶を送りたい。

山崎君の虐殺に抗議し、その死をのりこえて進もうとする全ての闘う学生・人民に全学連は声明する。全学連は必ずやこの死に報い、この虐殺の本当の張本人を摘発し、粉砕するまで闘いぬくだろう、と。あの記憶にも生々しい羽田デモから早くも十日近く経とうとしている。だが日本全土は依然として全学連の投げつけた羽田の闘いによってはりつめた緊張のさ中にある。そして時が経つにつれて羽田の正義者は誰であり、犯罪者がどちらの側であったかがますます明瞭に判別できるようになった。その中からあきらかに判別できることは、かの全力を尽した全学連の死闘こそが佐藤首相の南ベトナム訪問を最も真剣に受けとめ、くい止めようとした力であり、その必死の努力が全国民に深刻に問いかけたということである。

今や、われわれは一層声を大にして主張するだろう。全学連の羽田デモは日本人民が当然やらなければならぬことを最も忠実に実行したのであり、戦争協力と再侵略を企む佐藤首相は日本人民の総意に基き羽田から飛び立つことを実力で阻止されてしかるべきであった、と。全学連の闘いはあまりにも正しく、佐藤首相の南ベトナム訪問こそはあまりにも許すべからざる犯罪行為だったのである。

葉をなげつけ、ののしっている。いったい彼らは十月八日に何をしていたのか。「赤旗祭り」と称して、闘いをサポーターージュしてただけではなしに、完全に敵対する裏切りをしていたのではなかったのか。日本共産党は、羽田デモに敵対し、全学連と敵対し、もって、佐藤首相にこのうえない、後方の支援を与えているのである。このスターリン主義者の反動的背教を許さず、全学連の実力行動を断乎として守り続け、勝利のためにわれわれの立場を一層みがきあげなければならぬ。

そもそも、「学生の暴力」などとデマ宣伝をとはしているが、いったい諸君は決して忘れてはならないだろう。六五年日韓闘争以後一段と強化された機動隊のデモ鎮圧の現実を。学生が数限りなく受けた屈辱と抑圧をはねかえし、いわゆる「サンドイッチ」規制によってたたき折られた闘いを回復し、真の力強い人民の闘いを実現するために、警官隊に復讐し、彼らを粉砕し、のりこえたとしても当然ではないか。機動隊と装甲車の厚いカベを打ち破るものが、ほかならぬそれによって打ちひしがれ続けてきた学生の必死の努力であることもよろこばしい事実ではないか。

学生・人民が自らを守り、攻撃の弾丸を打ち返すために団結し、借りものでも、やとわれでもない自分の



全学連が一切の困難をのりこえ、国家権力のどう猛なる番犬、機動隊の暴力と闘い、全人民の利益と目的を貫き通すために死力をつくしたことは当然すぎる程当然であった。国家権力は、この対立があまりにも鮮明であり、それが顕在化することを防ぐために必死に全学連に罪をなすりつけようとしている。「一部学生の暴走だ」、「学生が学生を殺した」など、あらゆるデマ宣伝を強め、理由なき不当弾圧で切りぬけようとしている。

だが政府・ブルジョアジーの危機感とそのまわりの反動的「知識人」などの悲鳴にもかかわらずそれによって全学連は打撃を受けるだろうか。全学連に一切の罪をなすりつけて、そうした者の行為は正当化されるだろうか。全く、否である。佐藤首相の戦争協力参戦国化とそれを支持する一切の言動は全く孤立しており、日本からたたき出されなければならない。

それに対し、全学連の闘いは、当初受けた反動的宣伝の洪水や大弾圧にもめげず、ようやくその正しい意義が浮かび上がってきている。どのような手段を使っても全学連の闘いを歪めたり、まっ殺することは出来ない。

全学連は不滅である。山崎君の死という貴い生命の犠牲、しかも警官の棍棒による虐殺という悲惨な現実にも負けず全学連はそ

力で闘うことはまったく正当である。大多数のものが一握りのブルジョアジーにおしつぶされている現実を打ち破り、真の主人公として自己を発見し、主張し、実現するのに、他をはばかることがあろうか。

十月八日の羽田の闘いは、抑圧されたいっさいの闘いを自由に解放し、既成の活力を失ったいっさいの平和運動や社会運動に代る新しい革新の旗印をはっきりと打ち立てたのである。全学連の闘いは、既成の公認の指導部のワクを突破し、日本帝国主義との新たな、鋭い、非和解的な、そして勝利の日まで続く長期にわたる闘いを開始したのである。十月八日の闘いは七年前の安保闘争を受け継ぎ、なお怒濤の如く前進する全学連の闘いの先端であり、日本人民の抵抗と闘いの生きたのろしでもある。

全学連の戦闘的闘いは勝利のカギを握っているのである。屈辱と敗北の歴史に終止符をうち、日本人民の闘いの勝利をもたらすもの、それは、あの十月八日の羽田デモのような闘いをより拡大する以外には決してありえないのだ。国家権力の弾圧の厚い壁を打ち破り、それに敗退し屈服するいっさいの既成運動をのりこえ、戦闘的學生運動と全労働者人民の革命的前進をからとろう。

すべての学友諸君！ 労働者諸君！

われわれの任務は、まだまだつらく終ってはいない。羽田デモもほんの激動の序幕にすぎない。あれですら未だ敗北しているのだ。次の反撃の堡塁を築こう。

佐藤の訪ベトは、悪無限的に日本帝国主義の狂暴化、反動化へ拍車をかけていくにちがいない。かつて「大東亜共栄圏」といわれた東南アジアの後進・半植民地諸国への再支配と侵略の足音が高まり七〇年安保再改定の下敷きはつくられつつある。東南アジアの激動は、この日本帝国主義の反動化を要にして進もうとしている。アメリカの侵略と闘うベトナム人民を孤立

の死をのりこえて自己の正当性を主張し続け、闘い続けるだろう。

われわれの「佐藤首相の訪ベトを阻止せよ」という叫びは決して杞憂ではなかった。佐藤首相は一名の学生を死に追いやってまだ未だ一片の反省もせず、ベトナムに飛立った。その上、「北爆停止は不可能」などとずうずうしくも言ってはばからない。ベトナムへおり立つことは自ら進んで戦争と侵略の一翼を担い、東南アジアの盟主として君臨せんとする支配者の宣言に他ならない。こうした危険な野望を粉砕する以外に道はなかったのだ。佐藤首相がベトナム訪問を中止する以外に八日の羽田の衝突は不可避であった。

一切の責任は佐藤首相にあり、その犯罪性と反動性が重大であればこそ、全学連の絶対阻止の決意も固かつたのである。

かの全学連の闘いを、より一層徹底せしめよ！

第二、第三の羽田デモをおこせよ！

全学連の闘いと、金労働者・人民の闘いを結合し、勝利の砦を築こう！

山崎君の死をのりこえて前進しよう！

さらに問題はつきない。全学連の闘いに投げかけられる一切の攻撃にわれわれは応えようではないか。

ブルジョアジーだけではなく、日本共産党は、羽田デモを「一部極左暴力で許せない」と憎悪に満ちた言

させず、侵略本国になろうとしている日本の人民が、闘いの旗を高く掲げ、勝利的前進をからとることの意義は、かつてなく高まっている。すでに十月八日の羽田デモに南ベトナム学生が共鳴、呼応している。この国際的連帯と共闘の輪を、さらに拡大しよう。

全学連の闘いは決して孤立してはいない。すでに八日の羽田には国鉄労働者をはじめ、反戦青年委員会の先進的労働者が共に最後まで闘いぬいたではないか。六〇年安保より数段前進した力が全学連をとりまいている。いや労働者本隊の闘いに本当の火がつき始めたのである。闘う反戦青年委員会を中心にした労働者と全学連の固い結合で全ての壁を打砕こうではないか。十月八日の羽田デモの激動の波が去りやまぬ現在もなお、次の闘いが近づいている。

佐藤首相がいよいよベトナムにのりこもうとする十月二十一日に向け、いやそれを阻止し、抗議するべく二〇日夜から闘いが行なわれなければならない。

全学連に結集した日本の勇敢な学生は、いかなる困難と弾圧にも負けず、十・八羽田から、次の一步をさらにふみ出すことによって、ますますその戦闘性を証明するだろう。

全日本、全世界の学生は総て立ち上れ！

今こそ立ち上れ！

全日本の労働者と共に立ち上れ！

日本帝国主義の再侵略と戦争政策に反対し、佐藤内閣を打倒せよ！

七〇年安保再改定阻止めざし、十一月の佐藤訪米を今度こそは真に羽田で阻止せよ！ 阻止するぞ！

全学連の闘いに栄光あれ！

全学連と全労働者人民の団結に勝利あれ！

労働者人民の怒濤のごとき前進の前に支配階級を戦慄せしめよ！

一九六七年十月十七日

十・八羽田闘争に対し、五百万円救援資金カンパを訴える

全学連中央執行委員会

委員長 秋山 勝行
副委員長 成島 忠夫
書記長 蒲地 祐治
救対部長 山口 孝一

全学連は反戦青年委員会とともに、十月八日、佐藤首相の南ベトナム訪問に反対してそれを羽田で阻止すべく闘いに決起しました。この闘いは、ベトナム反戦闘争の新しい地平をきりひらき、日本のみならず、全世界の闘う人々に数多くの共感を与えました。この闘いに對し、政府・官憲は学生、青年労働者の頭上に警棒とガス弾の雨をふらせ、当日五十八名を逮捕したばかりか、全治一カ月以上の重傷五十二名を含む六百三十名を負傷させ、あまつさえ京大生山崎博昭君の尊い生命を奪い去ったのです。しかも、その後も官憲は法政、中大、早大などに踏みこみ、令状逮捕によって十月二十六日までに、全学連委員長長秋山勝行はじめ五名を逮捕し、さらに山崎君の死因をデッチ上げ、一方的かつ陰謀的に、学生の

運動する装甲車によるれき殺と発表し連日マスコミを動員して一大フレイムアップを強行しています。現在、官憲のわれわれに對する弾圧は次の二点に集中しています。

第一は、山崎君の死因について、一大フレイムアップを完結させることによつて、日本における戦闘的學生運動、労働運動の組織的壊滅を狙っていることです。

松川事件を想起して下さい。十年後の今日、事件の真実があまりにもみごとに暴露された今日、再び政府官憲によって一大フレイムアップが開始されているのです。われわれは、山崎君を殺したのは誰か、この真実をただちに明らかにすることが出来ます。われわれはその真犯人を全国民の前に告発しなければなりません。

第二は、十・八当日の全参加者を狙い、不当逮捕を拡大させようとしていることです。彼らは参加者全員を狙うことによつて、闘いをたたきつぶし、闘う組織をたたきつぶそうとしています。すでに逮捕者の自宅、下宿先がまったく不当にも家宅捜索されていますが、驚くべきことに、そこでは十・八闘争の関係物だけでなく、本人の私的な郵便物、学習ノート、預金通帳まで持ち去られ、あたかも破防法の実質的適用を思わせるものがあります。

われわれは、こうした強権的弾圧をはねかし、闘いを一層強めています。しかしながら、二十六日現在、令状逮捕された者を含めて二十九名が依然として権力的手中に奪われており、うち十五名がすでに起訴されました。さらに当日警棒などで頭を割られ、脳内出血などで十九名が入院中の状況にあります。われわれは彼らを早急に権力の手から奪いかえし、ともにスクラムを組み、戦線と闘いを強化しなければなりません。

- 全学連中央執行委員会は、労働者・学生・市民の皆さんに救援資金カンパを訴えます。
- (1) 起訴された学友をただちに権力の手から奪いかえし、さらに拘留中の学友を守り、ともに闘い抜くために。
 - (2) 入院中の学友の全治を早急にかちとるために。
 - (3) 山崎博昭君虐殺の真相を究明し、その張本人を告発するために。
 - (4) 山崎君の遺族に對する援助のために
 - (6) 逮捕された学友の早期釈放と、起訴された学友の全員無罪をかちとるために。
- 以上の救援資金のために、当面ただちに五百万円が必要です。
- 十・八闘争の切りひらいた地平を明らかにし、闘いと闘う組織を守り抜くために、心から五百万円救援資金カンパを訴えます。
- 一九六七年十月二十六日
- 送り先千代田区富士見町法政大経済学部自治会内全学連救対本部

羽田十・八救援活動についての要請

さる十月八日、佐藤首相の南ベトナム訪問への抗議行動に對し、過剰な警察力の行使が加えられ、その際、一名の学生の命が失われ、多数の労働者・学生が負傷しました。何名かの重傷者はなお病床にあります。

当日、学生だけでなく、多数の労働者が抗議のすわりこみを行なっていました。機動隊は、この人々にも激しい「規制」を加え、労働者に多数の重傷者を出しました。現在までの学生および労働者の逮捕者は六六名、起訴者および拘留者は二七名います。

亡くなられた山崎博昭さんの死因については、公表された警察の発表自体が時とともにかわり、それらが互いに矛盾するなど、「れき死」と考えるには疑問が多く、他方、担当の小長井弁護士は、死因として頭部傷害を重視しています。

当日の学生の行動についての意見の相違は当然あるとしても、わたしたちは、第一に、この事件の最大の要因は、首相の南ベトナム訪問の強行であり、それへの抗議という目標において、当日、羽田におもむいた学生・労働者への連帯を確認することが出来ます。第二にこの事件において、当日の空港付近の学生の集会・デモを一切禁止したなど、思想・表現の自由に對する不法な侵害が存在したこと、事件後の処置において、この方向が強化されようとしていることに對し、抗議します。さらに、機動隊の警棒使用において、法律の規定を超えた過剰な警察力が行使されたことに對し、強く抗議しなければならぬと考えます。

このような立場から、わたしたちは事件全体の真相を究明し、国家権力の不法な行使による犠牲者(死者・負傷者・逮捕者・起訴者)に對し、治療費と法廷費用の資金援助など救援の手をさしのべたいと考え、みなさまの協力をお願いします。

一九六七年十一月九日

よびかけ人

| | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 浅田 光輝 | 梅本 克己 | 井岡 大治 | 石田 郁夫 | 井上 清 | 茨木のり子 |
| 岩田 宏 | 小野十三郎 | 海老坂 武 | 大井 正 | 大沢真一郎 | 岡本 潤 |
| 小田切秀雄 | 小島 輝正 | 観世 栄夫 | 榉 光子 | 黒田 喜夫 | 河野 健二 |
| 菅原 克己 | 杉浦 明平 | 斉藤 一郎 | 佐多 稲子 | 寿岳 文章 | 新村 猛 |
| 野田 真吉 | 野間 宏 | 鈴木 道彦 | 田中寿美子 | 鶴見 和子 | 奈良本辰也 |
| 林 光 | 日高 六郎 | 野村 修 | 羽仁 五郎 | 壇谷 雄高 | 林 功三 |
| 水戸 巖 | 務台 理作 | 星野安三郎 | 本田喜代治 | 松田 道雄 | 三木 卓 |
| | | 森 毅 | 山下 菊二 | 雪山 慶正 | 吉野源三郎 |

事務局・東京都田無市緑町三丁目三ノ一六 水戸 巖

編集後記

佐藤首相の南ベトナム訪問に反対する羽田の歴史的闘争から二カ月がたった。十・八闘争は巨大なうねりとなって全国、全世界をおおい、十一月十二日にも闘いを爆発させた。いまわれわれは階級闘争の新たな時期に入りつつある。山崎博昭君を追悼し、羽田の闘いの意義を明らかにするために、この小冊子を全国民に送る。

一九六七年十月八日 再版

山崎博昭君追悼
羽田の闘い

発行日/一九六七年 二月 十日

編集発行/前進社 東京都

豊島区東池袋2の

62の9 佐藤ビル内

電話(九八四)

八六五一(代)

定 価/二〇〇円

送料五〇円

